

つなぐ 教師の学習コミュニティ

夜間大学院のスクールリーダー教育

スクールリーダーの学びの場

目 標

理論の意識化
+実践の対象化

院 生

出 会 う
交 わ る
協 同 する

教 員

目 標 の 共 有
交 流 の 促 進
協 同 の 支 援

基 軸

理 論 知 と
実 践 知 の 対 話



お 礼

夜間大学院のスクールリーダー教育は、教職員と院生が協同してスクールリーダーの学習コミュニティを創り出す試みです。授業実践、研究活動、修士論文作成は、理論知と実践知の対話を基軸に展開してきました。この取り組みは、大学・学校・教育委員会の連携協力に支えられています。関係機関に属する教職員の方々のご協力とご支援に厚くお礼申し上げます。この冊子は大学改革強化推進事業経費によるものです。

夜間大学院で
「働きながら学ぶ」
スクールリーダーに
敬意を表します。

大阪教育大学大学院・実践学校教育専攻 スクールリーダー・コース(SLC)

E-mail slp0303@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

HOME PAGE <http://www.osaka-kyoiku.ac.jp>

夜間大学院のスクールリーダー教育

大阪教育大学教授 大脇 康弘

堺市立堺高等学校定時制教頭 小山 将史

1 現職教員のための夜間大学院

夕刻になると、天王寺キャンパスは「おはよう」「おはようございます」のあいさつで、活気づく。若い学部生に交じって年輩の現職教員院生が足早に教室に急ぐ。ここは、全国唯一の夜間教育学部を基礎にした夜間大学院である。正式名称は、大阪教育大学大学院 教育学研究科 実践学校教育専攻（以下、夜間大学院と略）である。所在地は交通至便な天王寺で、「学び」を志す現職教員が昼間働きながら夜間に学んでいる。夜間大学院では実践的・臨床的教育を基本に据えて、教育実践の基礎理論を学びその対象化をめざす「実践的研究」に取り組んでいる。現在の入学定員は30名、教授スタッフは専任教員22名で、兼任教員5名、特任教員4名、非常勤講師5名である。

1996年創設以来、入学者は400名を超えている。

2 夜間大学院のカリキュラム編成

夜間大学院は、三コース制で、A. スクールリーダー・コース、B. 教職ファシリテーター・コース、C. 授業実践者コースに分かれる。それぞれのコースは、組織リーダー、実践リーダー、授業実践者を対象としている。実際には、組織リーダーや実践リーダーを志願する教職員は少なく、授業実践者は幅広い年齢層の教職員が集まる。彼らの問題関心と役割意識を拡充することが私たち教授スタッフの役割である。

Aコースは、現在組織リーダーである校長・教頭、首席（主幹教諭）、指導主

事が毎年度3〜5名集う。第一線の組織リーダーの力量を拡充深化させるのを特長としている点で、教職大学院や教育学系大学院と全く異なっている。教職員の属性は、校種、職位、地域など多様であり、個々人のキャリアや問題関心もまた多様である。こうした教職員の多様性を「出会う、交わる、協同する」というベクトルに沿うよう、大学教員は「目標の共有、交流の促進、協同の支援」の手だてを講じる。それは、カリキュラム編成、授業運営、個別指導の各レベルで様々に行われる。

カリキュラム編成（表1を参照）をみると、専攻共通必修科目の実践教育学特論、実践教育心理学特論では、学びを共有する学習方法と学習集団の形成を課題としている。グループワークやプレゼン・討議を通して、共に学ぶ意識形成と集団

目次

つなぐ 教師の学習コミュニティ — 夜間大学院のスクールリーダー教育 —

夜間大学院における スクールリーダーの学び

2

- ・夜間大学院のスクールリーダー教育 …… 2
- ・講義・ワークショップ統合型授業「大阪の学校づくり」 …… 5
- ・働きながら学ぶスクールリーダー …… 8
- ・実践的研究をめざす修士論文 …… 11

スクールリーダー教育の 授業実践

14

- ・学校マネジメント学 …… 14
- ・学校評価（付記 大阪の学校づくり） …… 15
- ・学校づくり …… 16
- ・スクールリーダー・インターンシップ …… 18
- ・スクールリーダー実践論 …… 20

資料 SLC 修士論文題目 SLP 報告書一覧

22

スクールリーダー院生 からの発信

23

執筆者一覧 大脇康弘（編者）、小山将史、深野康久、浜崎仁子、西川 潔、森 均、津田 仁、木岡一明、福山恵美子、赤石美保子、文田英之、松山康成

形成を行う。ここでは、多様な院生の意識がつながって、学習コミュニティの土台を形成することになる。

()は科目数

表1 カリキュラムの基本構造

1	専攻共通科目 (必修 2) 実践教育学特論、実践教育心理学特論
	コース専門科目 (必修 3 + 選択 1)
	A. スクールリーダー・コース (School Leader Course: SLC) ・学校マネジメント学、学校評価、学校づくり、SL インターンシップ
2	B. 教職ファシリテーター・コース (Mentor Teacher Course: MTC) ・教師発達学、教職ファシリテーター論、教職指導、MT インターンシップ
	C. 授業実践者コース (Fresh Teacher Course: FTC) ・授業研究論、授業ケーススタディ、授業づくり、FT インターンシップ
	多様な選択科目群
	◇学校教育学系の科目 ・教育学、心理学、道徳教育学、特別支援教育学、情報教育学の科目
3	◇教科教育学系の科目 ・教科教育の科目 (国語、数学、理科、音楽、美術、保健体育、英語) ・教科専門の科目 (国語、数学、理科、社会、生活、音楽、美術、体育、家庭)
4	特別課題研究 (選択必修 2)
5	修士論文

三コースの専門科目は、コーホート集団として協同学習を深めていく場である。この専門科目は、「Theory (理論と方法) : 理論と実証的分析」、Case Study (事例研究) : 典型的事例を素材にした研究協議)、Project (プロジェクト) : テー

マを設定して問題探求に取り組むグループ学習)、Internship (インターンシップ) : 実務実習とその反省的考察) の4種から立体的に構成されている。通常の内容領域による科目編成ではなく、理論と実践との関係づけの視点から方法的に組み立てた編成となっている。

スクールリーダー・コースの専門科目をみると、「Theory」学校経営の思想と原理を問う「学校マネジメント学」、Case Study「学校づくりの理論・政策・実践の事例研究」「学校評価」、Project「学校づくり」、Internship「実務体験とリフレクションを行う」「SL インターンシップ」となる。この他、選択科目として、学校組織開発を構想する「スクールリーダー実践論」、大学と教育委員会連携による開発型授業「大阪の学校づくり」の2科目がある。そして、修士論文は実践と理論をつなぐ「実践的研究」をめざしており、「特別課題研究」でゼミ方式の研究指導が行われる。

以上のカリキュラムを運営し、授業実践を進めていく理念は「スクールリーダーの学習コミュニティ」の形成であり、それは次の三つを目的としている。

a. 学校づくりの理論・政策・実践を広い枠組みで捉え、現場を深く理解すること

b. スクールリーダーとして学校づくりの方針と戦略を構想すること

c. 大学教員と現職教員が協同し、問題を深く解決する「知識創造」をめざすこと

換言すれば、「理論的基盤を持つ実践力」の育成と「実践的研究力」の獲得という二つの目的を同時に追求しているのである。ハイブリッド型大学院といえよう。

3 スクールリーダーのスパイラル学習

スクールリーダー院生は、学校現場では激職にあり、公務を最優先すべき立場にある。校長・教頭ともなれば、土曜日を入れて週3日通学するのが精一杯である。集中講義を活用するなどして、修了要件である30単位を修得する。2年目は、難関の修士論文の作成作業に全力を傾ける。

スクールリーダーは新たな理論・考え方に会えることからスタートする。課題として出される単行本や紀要論文を読み

込み、理解し、考える作業を重ねる。そして、レジユメを作成し、報告し、意見交換、集団討議する。また、グループワークやワークショップを取り入れた授業では、自らの経験や知見を生かしながら、課題に協同して取り組む。さらに、教育委員会での実務体験や校長のシャドローングなど実務実習を重ねる。

これらの学習は、論文を読む・考える・書くという活動を基本に、報告・発表・討議の活動を組み合わせていく。この学習活動を毎週、毎月、毎学期積み重ねて、スパイラル(循環)的に能力を高めていくのである。近年は、スクールリーダー・フォーラムにおいて自らの実践を語る・聴く・まとめるという活動を積極的に展開している。

スクールリーダーは、多忙な中、週末の土曜、日曜に集中的に自学自習、研究作業を行う。日常の職務の上に、大学院の学習をこなしていくには、知力・気力・体力が人一倍要求されるし、適切な内容・水準で仕事をこなす能力が要求される。2年間にわたって学ぶ大学院生活で、たくましい学習能力を培うことになる。

この学びのプロセスでは、だれしも自らの思考スタイルを揺さぶられる経験

をする。スクールリーダーは、教職経験を通して経験則、カンやノウハウを含む実践知を形成している。これらは特定の学校や行政の社会的文脈に規定されており、形式知だけでなく暗黙知の部分も少なくない。実践知の世界は多様性、多元性、曖昧さを持ちながらも、確かな経験と判断に基づいている。これに対して、理論知は論理性・体系性を志向し、現象を説明し予見する命題からなる。スクールリーダーが出会う理論知の世界は新鮮であり、現実を理解し説明する概念と枠組を提供してくれる。しかし、これまでの実践知と新たな理論知が調和するかという点、そうとはいえない。言葉にし難い微妙なズレを感じたり違和感を持つことがあるが、これは大事なシーズ(種子)である。実践者にとって、理論知の世界は論理性、体系性、明確さで圧倒されるが、それらを実践当事者としての知見・感覚と摺り合わせることで大事である。この実践知と理論知の葛藤は、理論と実践、思考と行為、分析と意思決定の葛藤・ジレンマであり、理論知と実践知の新たな関係づけ(対話)を行う契機となる。

表2 理論知と実践知の関係

概念	実践知	理論知	理論知・実践知の対話
用語	現場特有の言葉	概念・認識枠組	両者の使い分け
	多義性、包括性	専門性、分析性	両者のジレンマ
知識	個別具体的	一般的・抽象的	特殊と一般をつなぐ
	実践的知見・知恵	対象の説明、予測	
	経験の整理	定式化・体系性	
特徴	暗黙知を含む	形式知	形式知と暗黙知をつなぐ
	実践・改革志向	実証・普遍志向	臨床性・実践性重視
	属人的、主観的	論理的・客観的	論理的/主観的

夜間大学院では、学校現場の課題や問題を起点に、理論的認識を獲得しつつ、実践を対象化し再構成するリフレクシオンを進めようと考えている。こうした学習をスパイラル的に進めながら、学校づくりの見方・考え方を再構成し、確かな理論的基盤を形成していくのである。この意味で、夜間大学院はこれまでの「研究重視の大学院」というより、「理論・実践対話型のハイブリッド大学院」と呼ぶべきであろう。

4 スクールリーダーの学びの自己評価

それでは夜間大学院を修了したスクールリーダーは、自分たちの学びをどのように受け止め評価しているだろうか。ここでは全体的な傾向を整理していくことにする。

第一に、夜間大学院の授業について「学校での疲れを忘れる」「明日への元氣を得た」という印象的な言葉を紹介したい。多くのスクールリーダーが共有する実感である。本格的に学ぶことへの新鮮な喜びと共に、学校現場の問題を相対化し対象化することで発見、気づきがある。また、自由な空間で仲間と共に学ぶことで喜びを感じるのである。

第二に、「学校づくりを理論・政策・実践から総合的に見つめる力をつけた。」という声である。学校づくりの理論的基盤を学ぶことによって、全体状況を読み取り、実践方策を選択する確かな自信を得たのである。これまでの経験知・経験則に頼るだけの不安定さがなくなったのである。

第三に、「多様な教職員とネットワークを作れたのは、この夜間大学院で共同学んだからである。」との声も多い。ス

クールリーダーにとって、校種・教科、職位を超えて人脈を作ることは大きな財産となる。また、大学教員との協同学習、共同研究の経験は、今後の学校づくりを生かすことができる。

第四に、「学び続ける教師として自信や誇りを得ることができた。」という声は、夜間大学院関係者を励ますものである。これは、学校現場でも「学びの実践者」として、同僚、子どもたちに対して確かなプレゼンス(存在感)を示すことになる。

付記

本稿は『月刊高校教育』2013年10月号掲載の論稿を加筆修正したものである。

参考文献

- ・「スクールリーダーの学習コミュニティ」SLF、2012
- ・「ひらく教師の学習コミュニティ」SLC、2012
- ・「理論・実践対話型研究」の探究」『スクールリーダー研究』第4号、2013

講義・ワークショップ・統合型授業「大阪の学校づくり」

大阪教育大学教授 大脇 康弘

帝塚山学院大学特任教授 深野 康久

1 教育政策をふまえた学校づくりを学ぶ

夜間大学院スクールリーダー・コースのカリキュラムは、学校づくりの理論・政策・実践を関係づけること、理論知と実践知を対話させることを基本に編成されている。授業科目は、Theory, Case Study, Project, Internship のコース専門科目をはじめ、多くの科目で理論と実践の連関が図られている。今回取り上げるのは、大学と教育委員会が連携して開発した授業「大阪の学校づくり」である。この授業は、地元大阪における学校づくりの枠組みと実践を理解し、スクールリーダーとしての視野を広げ問題関心を深めることにある。

授業内容は、学校評価、授業評価、教職員評価に加えて、習熟度別少人数授業

または小中一貫教育など学校づくりの重要テーマから構成される。授業担当者は、総括責任者の大脇康弘に加えて、特別講師として大阪府および大阪市教育委員会の教育施策担当者(前職含む)を毎回招聘している。授業は特別集中講義として5月～7月の土曜日午後5時～開講される。時間帯は午後1時から5時50分で、5時間弱のロング授業である。この授業は、「大学と教育委員会の連携協力協定書」に基づく事業のひとつとして2005年に開設され、今年で9年目となる。本年度の授業の日程、テーマ、事例演習の方法、担当講師は表3に示すとおりである。

表3 大阪の学校づくり 2013 の概要

回	月日	テーマ	事例演習の方法	担当講師
1回	5/11	学校教育自己診断の政策と実践	データ分析、KJ法	村田純子・大脇康弘
2回	5/25	授業づくりの政策と実践	ケースメソッド法	深川八郎・大脇康弘
3回	6/15	大阪市の学校づくりの政策と実践	事業プラン作成	福山英利・大脇康弘
4回	6/29	教職員の評価・育成システムの政策と実践	疑似体験演習	田中 正・大脇康弘
5回	7/6	大阪府の学校づくりの理念と枠組	事業プラン作成	楠野宣孝・大脇康弘

授業責任者 大脇康弘、ファシリテーター 深野康久

毎回の授業は、一つのテーマを取り上げ、講義、ワークショップ、プレゼンテーション、まとめという流れで進める。これを簡潔に整理すると、次のようになる。

- ① 受講生による前回の授業の振り返り、② 大学教員から教育政策の特長と理論的基盤について講義、③ 特別講師から教育施策の目的・内容・背景および実践動向についての講義、④ 受講生の1分間スピーチ、(休憩)、⑤ 事例演習・演習の説明、個人ワークとグループワーク、(休憩)、⑥ 各グループのプレゼンテーション、⑦ 特別講師からの講評・まとめの講義、⑧ 大学教員からの論点整理・学習へのアドバイス、(⑨ 学習の振り返り)。

時間配分は、1コマ目で①②③④、2コマ目⑤、3コマ目⑥⑦⑧⑨を目安としているが、学習の進み方を見て適宜調整している。なお、②についてはこの2年間省略し、事例演習の時間に回している。これを特別講師と大脇がチーム・ティーチング方式で行い、ファシリテーター(2013年度 深野康久)が司会を担当し、院生の学習活動を支援する。

講義とワークショップを一体的に運営するが、後者の学習方法・形態は多様である。毎回、学校状況や実践をもとに学

習教材として作成された事例を準備し、データ分析法、KJ法、ケースメソッド法、事業プラン作成、疑似体験法に基づいて学習が進められる。つまり、毎回異なる学習方法・形態が採用される。受講生は毎年10〜18名と変動するが、毎回異なる数グループに編成され、主体的かつ協同的に事例演習に取り組んでいく。この中で、学習の方法と協同の仕方を学び、互いに学び合う学習コミュニティを形成していく。

このため、大脇と特別講師は各授業の内容や構成、事例作成や教授資料について打ち合わせを行い、当日は臨機応変に声かけをして進めていく。

2 ロング授業の学習過程

授業の実際をみるために、2013年度第1回(5月11日)の授業「学校教育自己診断の政策と実践」を取り上げよう。

午後1時、受講生が集まると、まず大脇から全5回を通じた授業の趣旨説明と本日のテーマの解説、特別講師の紹介があった。次に、村田純子・大阪府教育委員会事務局 高等学校課参事が講義し、

学校教育自己診断に関わる教育施策の経緯、「大阪府教育振興基本計画」における学校評価の扱い、学校での活用などについて詳しく話された。教育施策形成に至る教育界全体の動きから、施策決定に関わる議会の動き、さらに施策に対する校長の反応まで、活き活きと語られた。受講生は、教育施策の内容と背景だけでなく、各学校で施策を実行することの意味や具体的方策、そして今後の課題まで幅広く考えることとなった。現職教員は学校教育自己診断に関与しており周知のものであるが、講師の講義を通して新たな知見を得る。講義の後、受講生が1分間スピーチを行い、講師に自己紹介すると共に、ウオームアップする。ここで10分の休憩を取る。

次は事例演習の時間で、個人ワークとグループワークが行われた。今回は、学校教育自己診断のデータに基づいて学校の現状を分析し、学校づくりを構想することを課題としている。まず、JA高校の生徒による学校教育自己診断データが配付され、この学校の良さや可能性、問題点と課題を明らかにするという課題が示された。学習方法・形態はKJ法が用いられ、ポストイット青色・黄色2種が

配られた。個人ワークでは、気づいた点をどどんポストイットに書き込んでいく。次に、KJ法によって模造紙の上で同種のポストイットをグルーピングして名称を付けていく。そして、グループ間の関係を矢印で示していく。この学校の現状分析作業をふまえて、学校改善案について討議し、プレゼンテーション資料を作成していく。

再び休憩の後、グループごとに10分間の発表を行ったが、説得力ある学校改善プランが提起された。そして、特別講師の村田先生から講評とまとめの講義、大脇から補足説明とまとめを行った。こうして、午後5時50分に5時間弱の授業が終了した。

3 学習集団の形成と受講生の変容

受講生は現職教員院生であるが、その属性は年齢・性別・教職経験・職位など極めて多様である。校種も小・中・高校、(特別)支援学校、専門学校、大学と多岐にわたり、職位は校長・教頭、首席(主幹教諭)・指導教諭、各種主任、一般教諭、指導主事と多様であり、年齢も中堅・年

長教員の中に若手教員が一部参加している。受講生は今日の学校教育について問題意識や危機感を持ちながら学んでいるが、教育政策の動きを視野に入れた学校づくりを実際に経験している者は多くはない。

それだけに、学校づくりに関する教育政策の枠組みと実践指針について学び、学校づくりの実践方策についてグループで討議することは新鮮である。しかし、授業は5時間弱の長丁場であり、頭脳を総合的に活用していくので、精神的にはタフさを求められ、体力も必要となる。

特に、事例演習を行うグループワークは、ハードである。メンバー構成は多様な属性が出会うように編成され、毎回新たに組み替えられる。グループ活動は、最初はとまどいが多く、試行錯誤が続く。第1回は意見がまとまらず、休憩時間まで討議が食い込むことになる。

その後、回を重ねるたびに、話し合いが噛み合うようになり、テーマも深まる感触を得るようになる。受講者がグループワークの流れを理解しテーマに沿った話し合いができるようになる。グループでの話し合いは、当初は自分の立場からしか考えられなかったが、次第に施策の

方向性を視野に入れ、立場の異なる者の意見を取り入れながら、討議を行い、一定の方向性に収斂させていくようになる。ある中堅のスクールリーダーは次のように学びを振り返っている。

「グループワークを進めていく中で、それぞれの職種の経験を交えて意見を発表していた。その職種特有の経験や文化から発せられる言葉は、他では得がたいもので大変興味深く伺うことができた。その場では、私が今まで考えもつかなかったようなアイデアを示していただいたり、私自身に良いアイデアが浮かんだりした。また毎回、大脇教授がメンバーを入れ替えてくださり、偏ることなく皆さんとグループワークを行うことができたことも、私にとっての学びの幅が広がったように思える。

受講生がグループのプレゼンに向けて互いの意見を述べ合うことで、人の意見を咀嚼・吸収し、新たな自分の理解へと昇華させているのではないだろうか。それゆえにメンバー同士が思索し、語り合うことで新たな見識が生まれた。毎回の活動において二つのグループから、二つの見識が報告されていたことは、とても興味深い。」時間を忘れさせてくれるほ

ど集中できる学習形態であった」（YI、指導主事、2013年度）

受講生には、各回ごとに授業の概要をまとめるレポートが割り振られ、授業終了後には自らの学びを振り返るレポートが課せられる。報告書『大阪の学校づくり―夜間大学院の授業実践』（2005年度（現在））にはこれらのレポートが収録され、受講生の確かな歩みが記録されている。

4 リアルな学習体験の効果

「大阪の学校づくり」は、学校づくりの政策と実践の関係を学び、さらに事例演習によって実践方策を疑似体験する授業で、受講生は学校づくりのパスブックタイプを獲得し実践意欲を高めていく。テーマとして教員評価など賛否が分かれる教育施策も組み込んでいるが、特別講師の政策担当者としての確かな講義とリアルな事例演習を通して、受講生の認識は大きく変容する。この授業が教師や学校の常識を組み替える内実を持つことを、授業担当者として毎年度実感してきた。学校づくりを幅広い視野から考える

ようになり、組織リーダーとして意欲を高める院生も多い。さらに、これを契機に、指導主事や学校管理職をめざす者も出てくる。

以上の「大阪の学校づくり」のコンセプトを図式化してみると、図1のようになる。

大学と教育委員会の連携授業「大阪の学校づくり」は、教育政策と学校現場のダイナミックな関係を把握し、教育政策を踏まえた学校づくりに貢献できるスクールリーダーの育成をめざしている。ここに夜間大学院のプレゼンス（存在意義）を確認できるのである。

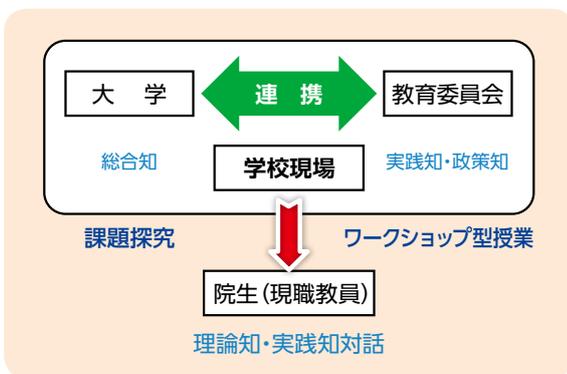


図1 大阪の学校づくりのコンセプト

付記

本稿は『月刊高校教育』2013年11月号掲載の論稿を校訂したものである。

参考文献

- ・「大阪の学校づくり―夜間大学院の授業実践」大阪教育大学スクールリーダー・プロジェクト、2005年度（現在）
- ・中野民夫『ワークショップ』岩波新書、2001
- ・山内祐平他編『ワークショップデザイン論』慶應義塾大学出版会、2013

スクールリーダー・セミナー 「大阪の学校づくり」の授業体験

詳しくは、大阪教育大学HPにてご案内

働きながら学ぶスクールリーダー

大阪教育大学教授 大脇 康弘

和泉市立光明台南小学校教頭 浜崎 仁子

1 夜間大学院の学び

夜間大学院は、現職教員を対象に「働きながら学ぶ」学習・研究環境を構成している。その一環であるスクールリーダー教育の理念は、①スクールリーダーの「学習コミュニティ」、②学校づくりの理論知と実践知の対話、③学校を巻き取りする能力の育成、④スクールリーダーの協同学習、⑤大学と教育委員会・学校の連携協力である。夜間大学院はスクールリーダーが学び合い、研究者と実践者が協同して教育課題を探究する「学びの場」「学習コミュニティ」を創ることをミッションとしてきた。つまり、スクールリーダーが現在の課題に立ち向かい未来を構想するためのデモクラティックな時空間を創ることをめざしてきた。

スクールリーダーは「理論的基盤を持つ実践的指導力」を高めると共に、理論と実践を統一する「実践的研究」に取り組む。そこでは理論学習を通して概念や認識枠組を学習し、教育現象を対象化し切り開いていくこと、および自らが担う学校づくりの実践を省察し再構成すること、というベクトルが異なる作業に取り組むことになる。いわば「理論の意識化と実践の対象化」が課題となる。特に、修士論文は「実践的研究」を目標としており、そのために「理論知と実践知の対話」が必要不可欠となる。その意味で、夜間大学院は「理論・実践対話型のハイブリッド大学院」である。

この夜間大学院の実践は、スクールリーダー・フォーラム(SLF)と連携しており、広がりを持っている。いずれも、スクールリーダーが出会い、つなが

り、協同するための「広場」であり、スクールリーダーが学び育つインキュベーター(孵卵器)になると考えられる。両者は参加者の規模、テーマ・内容の総合性・体系的性、事業日程の長短・持続性、期待される教育成果においてかなり異なっているが、スパイラル的に影響し合っており、プラスの効果を生み出してきた。そのため、大阪のスクールリーダー教育を「フォーラム―夜間大学院ブリッジ方式」と呼称する。

2 夜間大学院を選択する

夜間大学院は、交通至便な天王寺駅に近く、大阪府内だけでなく、奈良県、兵庫県、和歌山県、三重県から通学している。スクールリーダー・コース(SLC)

の入学人数は、2007年度以降現在までに5、2、2、4、4、5、3(人)で、年平均3・6人である。その内訳は年度によって異なるが、校長・教頭、首席(主幹教諭)・指導教諭、指導主事など第一線の人たちが多くを占めている。その中の約4割は、大阪教育大学と大阪府教育委員会・大阪府教育委員会合同プロジェクト「スクールリーダー・フォーラム(SLF)」や「スクールリーダー・セミナー(SLS)」に参加し、さらに「プロフェッショナル」をめざして本格的に学ぶ決意を固めて入学してくる。すでに校長・教頭として最前線で活躍している人々が、学校づくりの理論・政策・実践を学ぼうとして進学してくる。この点はスクールミドル養成を主眼としている教職大学院と異なる夜間大学院のプレゼンス(存在理由)となっている。

学校現場が多忙化し、激職についている人たちが、なぜ夜間大学院で学ぶことを選択するのだろうか。スクールリーダーの学習ニーズと切実な向学心に支えられているが、その学びの実態、日常生活はどんなものだろうか。ここでは、夜間大学院で学んだスクールリーダー浜崎

仁子(ひとこ)に登場してもらい、そのリアルな学びを語ってもらうことにしよう。

3 学習する スクーラーリーダーの日常

私(浜崎)は、小学校教諭として25年間勤め上げ、そのうちの半分を(特別)支援教育に捧げてきたが、先輩校長の助言もいただき管理職になった。教頭という立場は驚きの連続であり、学校経営・教育行政に関して、校長の指導を仰ぎながらがむしゃらに取り組んできたものの、いつもどこかに迷いがあった。

管理職として、自分に足りないもの、学ばなければならないことは膨大であり、常に今の学校経営に対する危機感があつた。学校組織をどのように確立すればよいのか、今起こっている事象を解決に導くにはどうすればよいのか等、管理職としては日々勉強が不可欠である。私は、目の前の困難な状況に立ち向かうために、もっと知りたい、もっと学びたい、困難な状況を打ち破るために自ら新たな枠組みを創りたいと思うようになった。

ただ、すでに50歳を超えて、学校管理

職としての残り時間も少なくなってきた

いる現在、休職して大学院で学ぶ時間はない。そこで、管理職として働きながら、大学院で研究・学習するという二足のわらじを履くことを選んだのである。あえて、そのような環境に自らを置いて、自らを叱咤激励しなければ、目の前で起こる事象だけにとらわれて日常に埋没してしまうのではないかと怖れたのかもしれない。時間的にも体力的にもかなり無理をしなければならぬだろうことを覚悟の上で、受験を決意したのである。

大学院受験のための勉強は、自らの問題意識を明確にするところから始まった。入学試験では小論文の他に、大学院での研究計画書の提出が求められ、口述試験まである。仕事を終えて、夜遅く帰宅してから研究計画を練る。自分の考えの未熟さを思い知らされ、合格できるのだろうかと不安にもなる。しかし、事前のオープンスクールでの授業見学やスクールリーダー・フォーラムへの参加を通して、同じ立場の学校管理職でありながら、生き生きと学びを進めている先輩方の姿を見て、大学院入学への期待は深まるばかり。やっと手にした合格通知は

とても嬉しかったものだ。

さて、大学院入学とともに、私の日常生活は大きく変わった。学校長の理解と家族の支えがあつて初めて可能になる大学院生活だが、学校では誰よりも長時間働き激務といわれる教頭職にある私にとって、想像以上に過酷な生活を強いられることになった。

大学院の授業のある平日は、仕事を定時で切り上げて電車に飛び乗り、授業に駆け込む。土曜日は、地域の行事や仕事のため午前中はほとんど出勤しており、昼食もそこそこに大学に移動し、図書館で勉強を進め、夕方からの講義。その後、閉館まで図書館でレポート作成や書籍・論文検索を行う。平日は仕事と大学院の授業で精一杯なので、時間の取れる土日に先行研究や関連図書を読んでの修士論文の準備をすることになる。

授業のある日、一日の流れは次の表4のようになる。朝起きた時から時間との闘いは始まっている。日常の家事を朝のうちに済ませ、一日の仕事の予定をざっと頭の中で組み立てる。学校での仕事中は気を抜く時間などない。時計を気にしながらあと10分、あと5分と時間を区

切って仕事を片付ける。職場を出て駅に着く頃には、すでに頭の中は授業のことで占められている。ギリギリで大学に駆けこむことも多い。授業では、学友たちとの熱く濃厚な喧々譁々の議論もあり、

表4 ある大学院生の1日(1回生後期)

時刻	行動	時刻	行動
6:00	起床 朝食 洗濯 夕食の下準備	18:00	3限授業開始
7:00	職場に向かいながら今日一日の計画を立てる	19:40	4限授業開始
7:30	仕事開始	21:10	オフィスアワー・修論指導
12:30	昼食をとりながらメールチェック	22:00	大学を出て帰宅 電車の中で復習
17:00	職場を出て駅に 電車の中で予習	23:00	帰宅 夕食 入浴 後片付け
		24:00	課題について考えながら就寝

その後、修論指導を受けているとあつという間に時間は過ぎる。大急ぎで帰宅し、夕食・入浴・後片付けを済ませるともう就寝時刻。体調を崩さないよう、睡眠時間は一定時間確保するように心がけている。

そんな中で修論の構想を練り執筆を進めていくためには、夕食準備や片付けの時間、駅と家とを小走りに駆けて往復している時でさえ、頭の中はいつも研究内容について考えている。土日にパソコンの前に座ると、すぐに書き始められるように、下準備を行っている。

そこまでして、今、なぜ、夜間大学院で学ぶのか？と問われれば、働きながら大学院という環境に自分を置くことで、得られるものの大きさを思うからである。たしかに時間的にも精神的にもギリギリの生活である。しかし、それを凌駕する充実した「学び」が大学院にはあった。それは、先生方と学友に支えられながら、努力すれば、引き寄せることができる宝物なのである。

4 夜間大学院と 学校現場との往還

学校改革が急激に進められる中で、私はこれまでの学びとは質的に異なる大学院の学びを感じた。学校づくりの理論・政策・実践を広い枠組みで捉え、現場を深く理解する授業や、スクールリーダーとして学校づくりの方針と戦略を構想するワークショップ、大学教員と現職教員が協同し、問題を深め解決する「知識創造」をめざす試みもあった。そして、これら理論知を磨く大学院での授業は、お互いにつながり合い、影響し合って私たち大学院生の頭も心も揺さぶったのである。

学校経営を担う立場にあるスクールリーダーが同じ授業やゼミに集い、自治体や校種の違いを超えて、新鮮で深みのある議論が生み出されることに驚き、感動もした。お互い忙しい身ではあるが、働きながら学ぶという同じ立場にある学友たちとともに、語り合い、学びあい、高め合う時間を共有できたことはこの上ない幸せであった。行きつづまり、悩み、もがき、苦しんだ日々もあったが、それ

を乗り越えることができたのは仲間がいたからに他ならない。

それぞれが、夜間に、少し無理をして、それでもこうやって学ぶために集うのは、いったい「どこ」に「何」があるからなのだろうか？ いや、ここで学んで思うのは、「どこ」に「何か」があるのではなく、「ここ」は「何か」を生み出す場所なのだということである。みんなの協働的営みで生み出した「何か」をそれぞれの職場に持ち帰り、大学院で学んだ理論的基盤を活かして、具体的な手立てを提案し組織が動いた時など、得も言われぬ喜びが湧きあがってくる。これこそが、大学院で学ぶ院生の誇りであり、学びを持続させるものと言っても過言ではない。

このように、学校現場と夜間大学院を自在に行き来し、理論と実践を対話させることで、学びの深まりがあると感ずる。これは夜間大学院が大切にしているミッションであり、今まさに求められているものである。

付記

本稿は『月刊高校教育』2013年12月号掲載の論稿を加筆修正したものである。

参考文献

- ・第12回スクールリーダー・フォーラム報告書『スクールリーダーの学びの場：理論知と実践知の対話』SELF、2012
- ・「スクールリーダーの実践的研究」『学校教育論集2012』大阪教育大学・教育経営学研究会、2013
- ・「ひらく 教師の学習コミュニティ」SLC、2012



実践的研究をめざす修士論文 ―理論知と実践知の対話―

大阪教育大学教授 大脇 康弘

御所市立葛城小学校校長 西川 潔

1 「理論・実践対話型」の 実践的研究

現職教員を主対象とする夜間大学院は、昼間働きながら夜間学ぶことを基本にしている。職場と大学院が日常的に地続きであることは、学習・研究を進めていく上で利点と弱点の両面がある。それは、夜間大学院の学びの目的・内容・方法・形態をどのように構成するかということと深く関わっている。一方で、職場で取り組まれている実践を夜間大学院に持ち込み課題解決や学校改善を図るという連続した道があり、他方で、職場と夜間大学院（実践と学習・研究）をいったん切り分けながらつないでいく道がある。これは、研究と実践、理論知と実践知、理論的・実証的思考と実践的・状況対応的思考という概念の定義に関係し、夜間大

学院の学習・研究活動の組織化、教育機関の役割・機能に関わっている。私たちの夜間大学院は後者の道を選択し、「理論・実践対話型」のカリキュラム編成、授業科目の設定、授業運営を行ってきた。スクーラーリーダーは「理論的基盤を持つ実践的指導力」を高めると共に、理論と実践を統一する「実践的研究」に取り組み。そこでは理論学習を通して概念や認識枠組を学習し、教育現象を対象化し切り開いていくこと、および自らが担う学校づくりの実践を省察し再構成すること、というベクトルが90度異なる作業に取り組み。いわば「理論の意識化と実践の対象化」が課題となる。修士論文は、この二つの課題を同時に追究し統一する象徴的なものである。私たちは、「理論・実践対話型」の「実践的研究」を大切な目標として修士論文に挑戦してきた。ここ

2 「実践的研究」の要件

では、この修士論文の特徴を整理し、その研究作業の実際を述べることにする。

「理論・実践対話型」の「実践的研究」は、約10年間にわたる修士論文ゼミ指導の中で形成されてきたもので、夜間大学院独自のものである。この「実践的研究」の特徴を研究のテーマ・対象・方法に絞って整理すると、次の三つが重要な要件となる。

第一に、研究テーマは、理論的基礎を持つと共に実践課題に応えるものとして設定されていることである。研究テーマは、①自己の問題関心、②学校現場の実践課題、③先行研究の成果という三角形を結ぶものとして設定される。実践者の

研究は、①や②に傾斜して③が疎かになると、個別具体的実践を整理することに終始し、一般性・普遍性が弱いものとなる。主要な先行研究を読み込み格闘し、自らの問題意識を拡充深化させる中で、研究テーマの焦点化、研究仮説の形成を進めることが大切である。

第二に、研究の目的・対象・方法が三位一体になっていることである。実践者が自らの実践を研究対象とする場合、研究テーマの焦点化、研究方法の洗練で問題を抱えるため、対象への切り込みが浅く、平凡な実践報告に陥ることが少なくない。研究対象として自らの実践だけでなく比較対照できる実践事例を意図的に組み込むことが必要不可欠である。ここでは二つ以上の実践事例を比較する研究の視点や枠組みが必然的に求められる。

第三に、研究テーマに沿って自らの実践を対象化し、検討することである。研究テーマを意識した実践を展開し、その実践の内容・方法・過程を対象化し、その意味づけを行う。ただし、実践は多様な条件・要因の中で展開されており、研究テーマに沿わない点も少なくない。そのため、自らの実践を通して研究テーマを緻密に検証することは難しいが、実践

の現実に沿って分析を行うのである。ここでは実践分析の意義と限界をふまえた

この「実践的研究」「理論・実践対話型研究」と類似している用語として、「実践研究」「実践型研究」がある。いずれも「実践者が自らの実践活動を対象化し、その意味づけや課題解決を行う研究」である。福井大学教職大学院では、「実践―省察―再構成のサイクル」で学習を深め、「学校改革実践研究報告（長期実践報告）」としてまとめる。また、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターでは、学術研究論文に対して実践者が行う「実践研究」「実践型研究論文」を独自に位置づけ、その基本的要件を明示している。いずれも自らが関係する実践を記録対象化し、記述することを基本としており、私たちがめざす「実践的研究」とは目的と特徴がかなり異なる。以上から、「実践的研究」「理論・実践対話型研究」の要件を提示すると、次の5つになる。

- ① 自らの実践経験に根ざした問題意識を拡充深化させて、理論と実践をつなぐ研究テーマを設定していること。
- ② 主要な先行研究を読み込んで、それと格闘し問題提起を試みていること。

③ 研究の目的・対象・方法が関連づけられていること。

④ 研究テーマを意識した実践を展開し、その実践の内容・方法・過程を対象化し、その意味づけがなされていること。

⑤ 理論知と実践知の対話が行われ、その意義が記述されていること。

総じて、「実践的研究」「理論・実践対話型研究」は、理論知と実践知が「交流・対話・統一」されることを基軸にしている。実践者が当事者として取り組んだ個別具体的な実践をその社会的文脈を含めて対象化する中で、その実践が孕む一般性・普遍性を抽出する道筋も開かれるのではないだろうか。けれども、スクーラーリーダーが「実践的研究」に取り組む道筋には多くの困難や課題が待っている。とりわけ、理論的・実証的思考を確かなものにし、実践的・状況対応的思考を対象化していくこと、そして理論知と実践知をつないで「内的対話」を行うには、相当の修練が必要である。しかし、その困難な道を進めることによって、新たな世界と実践指針が見えてくる。実践者が自らの実践拠点に根ざした「実践的研究」に取り組むことは、新たな世界を切り開

く挑戦である。次に、修士論文の作成に取り組んだ一人、西川潔がその実際を述べよう。

3 修士論文との格闘

私たちスクーラーリーダーは、日々携わる学校経営の理論的裏付けを求めて、経験則、経験値だけでなく理論知を獲得しようとして、夜間大学院の門戸をたたいた。夜間大学院における修士論文の比重は大きい。修士論文に関係する授業「特別課題研究」（修論ゼミ）は大学院2回生対象に4単位設けられているが、研究作業は1回生の後半から本格的にスタートする。公式的には、1回生の1月初旬に修論構想発表会、2回生の8月下旬に修論中間発表会が開催され、修論提出後に修論公開審査会が2月初旬に行われる。それぞれの公式行事が修論作成の重要な通過ポイントとなる。

修論ゼミはゼミ生みんなが集まる集団指導と必要に応じて行われる個別指導からなる。集団指導は毎週一度120分を目安に行われる。その流れを図式的に示すと、研究テーマの選定・明確化（キー

ワード5個）、主要な先行研究（研究者3人）の読み込み、研究テーマと対象・方法の確定、調査・観察・実践による資料・データの収集、その分析作業、論文構成、論文の各章・各節の執筆検討、論文の完成、となる。この修論作成作業に取り組む中で、スクーラーリーダーはいくつかの壁や困難に直面し、立ち止まり、軌道修正し、最後には追い込みをかけて、完成に辿り着く。この間、頭の片隅には常に、論文テーマ・論点があり、土曜・日曜には集中的に時間を取って論文を執筆する。

まずは各自の研究テーマに基づいた先行研究を読み込み、レジユメを作成する。ゼミではそのレジユメを基に質疑応答、検討する。そこに大脇教授の的確な指導が入る。西川はその指導をリコーダーに記録し、それをテープ起こしして、研究作業を立て直してきた。2012年度のゼミ生3名はいずれも現職の教頭で、1回生1名も参加した。各自の修士論文テーマは「教職員の評価・育成システムの政策と実践」「内発的改善力を基盤とした学校組織改革」「生徒の学習環境構築力の形成」「高校における学校改革実践の事例研究」と多様であった。校種・地域な

ど異なる点もあったが、校長・教頭としての共通基盤に立って、意見交換や集団討論が行われ、相互に啓発され励まされるのが少なくなかった。それ故、ゼミの報告レジュメの作成は大変であったが、ゼミは楽しみであり、また次の課題への挑戦を重ねることができた。

さて、研究作業が深まってきたら、修士論文の章節構成を行い、いよいよ執筆作業に入る。執筆作業は2回生の6月から取りかかったが、初めの1ヶ月はほとんど前に進まず、どうしてここまで書けないものかと随分悩んだ。しばらくして、その原因が実践記録と研究論文の違いであると気付いた。これまで学校現場での実践をまとめる機会があったが、それは自分の実践を整理してまとめるもので、論理性・実証性が十分でなく一般化を意識したものではなかった。

修士論文の研究過程は、研究のテーマと対象・方法の連関が鍵となり、先行研究の到達点をふまえた課題設定が重要となる。研究テーマに沿った先行研究を探し出す難しさ、先行研究と自身のテーマとの関連づけ、理論と実践の往還など、大きな山をいくつも乗り越えて修論を作成したが、完成した時の達成感は一生涯

思い出である。

4 実践的研究と実践展開のつながり

夜間大学院での学びはスクールリーダーとしての実践的研究力に結び付いていると、大学院修了後に感じている。スクールリーダーは学校現場で様々な事象について判断し、決断したり、方向性を導き出したりする場面が多々ある。その時々々に事象を対象化し、理論的な裏付けを考え、論理的に考察し、結論を導き出す力が必要となる。こうした力が修士論文の作成過程を通して培われたのである。

スクールリーダーは、大学院修了後も学校現場で「理論知と実践知の対話」を重ねて「実践的研究」に取り組んでいる。西川の修論テーマは「内発的改善力を基盤とした学校組織改革―統制化と協働化の共存を軸に―」であった。夜間大学院に通いながら、このテーマに基づいた実践を学校現場で行い、理論との対話を繰り返しながら修士論文をまとめた。大学院修了後、研究テーマを「校長のリーダーシップ」との関連に発展させて、現

在も学校組織改革を進めている。その学校組織改革を推進する時に生きてくるのが、これまでの理論研究である。学校の進むべき方向性についての理論的裏付け、事実・事象に対する理論的価値付け、具体的事象における統制化と協働化の共存についての考察など、大学院で学んだ理論研究が様々な場面で役立つ。そしてこれらの実践を記録しながら理論との対話をスパイラル的に繰り返し、「実践的研究」を継続している。

夜間大学院で学んだスクールリーダーは大学院修了をゴールとは考えていない。大学院修了は一つの通過点であり、新たな学びのスタートである。大学院修了後に日本教育経営学会年次大会で研究発表を行い、スクールリーダー研究会「スクールリーダー研究」へ論文投稿(査読付き)を行っている。修士論文は夜間大学院の学びの集大成であるが、スクールリーダーの学びと実践はここから新たなスタートを切る。これからも「学び続けるスクールリーダー」であることをめざして。

付記

本稿は『月刊高校教育』2014年1月号掲載の論稿を校訂したものである。

参考文献

・『学校教育論集』(2005、2013)、大阪教育大学教育経営学研究会、2005、2014年。
・『スクールリーダー研究』第1、4号、スクールリーダー研究会、2010、2013年

贈る言葉

スクールリーダーが夜間大学院に進学し「働きながら学ぶ」ことによって、学びの道筋ができた。理論知を学び、実践知を明確にしながら、教育実践を切り開いていく取り組みが、大学教員、学友と協働する中で重ねられた。修士論文はその代表的成果で、理論・実践対話型の「実践的研究」としてまとめられた。
夜間大学院を巣立ったスクールリーダーたちが、学校現場や教育行政において新たな道を切り開き、教育関係学会で学会発表することを期待したい(大脇)。

学校経営の思想と原理を問う

学校マネジメント学

大阪教育大学教授 大脇 康弘

1 実践的研究論文が素材

この授業では学校経営の思想と枠組みを検討し、スクールリーダーが学校づくりの理論的基盤を理解し深めることを狙いとしている。「学校マネジメント学」はスクールリーダー・コース(SLC)の必修科目で、前期の授業「学校評価(ケースタディ)」を受けて、理論と方法を扱う。

授業構成はオーソドックスなゼミ形式をとり、文献を精読し、討議を重ねていく。文献は、学校経営に関して広がりや深さがあり、スクールリーダーにとって読み応えがあるものを基準に選定している。具体的には、篠原清昭編『スクールマネジメント』『学校改善マネジメント』をはじめ、学会誌や紀要論文から選んでいるが、近年は佐古秀一氏の「内発的改善力を高める学校組織開発論」に関する研究論文を取り上げている。参考文献

として『H・ミンツバーク経営論』やコッターの『ビジネス・リーダー論』も勧められている。

受講生はSLC院生5名前後で、校長・教頭、首席(主幹教諭)、指導主事など学校経営実践を積んでいるものが多い。このため、実践的研究論文を自らの経験と照らし合わせ、自校の経営実態に応用できないかなど、かなり読み込みをしている。私はこうしたスクールリーダーの知見が討議の場に提示され論議が深まるよう、ファシリテートしていくことを大事にしている。

2 授業の展開

授業の構成は、論文のポイントと論点について私から紹介(20分、以下単位は略)、レポーターがレジュメに即して報告・コメント(30〜40分)、後半の討議(30分)は私から論点を2〜3提示し、

それについて意見を出してもらう。学習集団が形成され、論議が拡散しなくなると、学習集団に論議を委ねるようにしている。

各年度で取り上げるテーマは、学校経営改革、学校組織開発、スクールリーダー、学校ビジョン、学校評価、カリキュラムマネジメント、学校・地域連携、学校臨床、学校危機管理などである。文献の読み込みでは、問題設定、認識枠と方法、キーワード、主要な研究者の論点に留意するよう促す。これがある程度できると、学校づくりの理論と実践の交流・対話へと導いていく。つまり、個々人が豊富に持っている学校づくりの経験や知見(実践知)を生みの形で提示することと避けて、一定の枠組みをもった研究論文の読み込みを通して、自己の実践知を整理し相対化していくことを大事にしている。こうした取り組みの中で、学校づくりの「理論知と実践知の対話」の道筋を意識するようになる。また、自らの経験と勘に支えられた学校マネジメント像を再構成することもある。

後半は、佐古秀一氏の「学校組織開発論」に関する論文を数本検討し、その問題意識、研究方法、実践の対象化、効果の検証、理論化について検討している。この学校組織開発論を批判的に読み込むことで、「実践的研究」の枠組みと方法を対象化し、研究作業や「理論知」の独

自性を自覚するようになる。このことは、同時に取り組んでいる修士論文の研究作業に示唆する点が多い。

3 デモクラティックな学びの場

スクールリーダー・コースの授業では、学校での役割や実績を前面に出すのではなく、一人ひとりが学校づくりの理論と実践を架橋するために、自由な討議を重ねることを重視している。そのためには「デモクラティックな学習空間」を形成することが必要不可欠である。こうした学習を重ねることは、スクールリーダーが職場の実践を相対化し、広く深い認識ができることにつながる。そして、新たな実践意欲を生み出すことにもなっている。

主要文献

- ・篠原清昭編『スクールマネジメント』ミネルヴァ書房
- ・篠原清昭編『学校改善マネジメント』ミネルヴァ書房
- ・佐古秀一他『学校づくりの組織論』学文社
- ・小島弘道他『スクールリーダーシップ』学文社
- ・大脇康弘『学校改革とスクールリーダー』教育経営学研究会
- ・ミンツバーク『H・ミンツバーク経営論』ダイヤモンド社
- ・コッター『ビジネス・リーダー論』ダイヤモンド社
- ・コッター『コッターのマーケティング・コンセプト』東洋経済新報社

学校づくりの理論・政策・実践の事例研究

学校評価

大阪教育大学教授 大脇 康弘

1 学校評価の重要性

この授業では、学校評価に関する基本文献を読んだ上で、学校評価の実践事例を提示し、その特徴、組織と過程、効果と課題について多面的に検討する。スクールリーダー・コース(SLC)の導入科目として前期に開講されている。受講者は他コースの学生も含め10名弱である。

今日の学校はビジョンを掲げて教育活動・経営活動を組織し、学校評価によってその成果を確認し、学校改善を図っていく。その取り組みと結果は学校の関係者に公表し説明していく責任がある。いわば、学校が「評価し評価される」時代になったが、学校評価は教職員評価、授業評価と並んで、学校経営改革を牽引する重要な施策であった。

学校評価は2002年の法制化とその改正、「学校評価ガイドライン」の制定・

改訂を経て、現在では、自己評価、学校関係者評価、第三者評価の三種とされている。学校評価の施策は大阪府と大阪府で異なり、市町村での政策展開も一様ではない。また、他府県の取り組みも多様である。

授業では、地元大阪での政策と実践に着目しつつ、それを全国的視野で位置づけ、特徴と課題を明らかにしていく。その際に、学校評価を理論・政策・実践の三側面から総合的に検討できるよう指導している。

スクールリーダーは学校評価に中心的に取り組んだ経験を持ち、その意義と共に運用の難しさを熟知している。学校評価の政策と実践を検討する際、そうした知見や問題意識を出してもらいながら、学校評価の認識を広げる一方で、改善のための実践指針を獲得できることを意図している。

2 実践事例を考察する

学校評価を検討する基本テキストとして、「学校評価を共に創る」[学校をエンパワメントする評価]を使用している。前者は大阪府の事例が中心であり、後者は、川崎市、仙台市、京都市の実践事例が取り上げられている。事例としてまとめられたものを学んだ後に、身近な実践事例を持ち寄り、学校評価データをはじめ、学校評価の組織と運用、問題点と課題などを検討する。この時、前半で学んだ学校評価を認識する枠組みや評価基準が生きてくる。一定の理論的枠組みを持ちながら現場の実践的問題意識がうまくかみ合うと、実践的研究の素地ができてくる。

さらに、学校の内部評価と外部評価の関係、学校の評価機能と支援機能のずれ等については、イギリスやニュージーランドの学校評価システムと実践事例を検討する。ただし、授業の構成上、この話題に触れるに止める。

3 理論的視野と実践的関心の交錯

夜間大学院で学ぶスクールリーダーは、校長・教頭として最前線で活躍しているが、さらに「プロフェッショナル」を志す者が少なくない。私はこのスクー

ルリーダーたちが確かな理論的基盤を持ちつつ柔軟な学校経営実践に取り組み実践指針が獲得できるようにしたいと考えている。そのために、授業「学校評価」はスクールリーダーが学びのファーストステップを刻む重要な内容となるよう、毎年度新鮮な気持ちで臨んでいる。

参考文献

- ・大脇康弘他編『学校評価を共に創る』学事出版
- ・大脇康弘編『学校をエンパワメントする評価』ぎょうせい
- ・大脇康弘編『学習するスクールリーダー』慶應義塾出版会、近刊
- ・木岡一明『新しい学校評価と組織マネジメント』第一法規出版
- ・窪田真二・木岡一明編『学校評価の仕組みをどう創るか』学陽書房
- ・第9回スクールリーダー・フォーラム報告書『豊かな学校評価を求めて』SLF、2009

大学と教育委員会連携の授業開発
[大阪の学校づくり]は、冊子5-7頁を参照。

Profile

大阪教育大学教育学部教授
大脇 康弘 (Owaki, Yasuhiro)

教育経営学・教師教育学専攻。スクールリーダー教育を理論的・実践的に探究する。『教職研修』『月刊高校教育』『悠+』で、スクールリーダー教育の連載を行う。編著書に『学校をエンパワメントする評価』ぎょうせい、『学校評価を共に創る』『学校を変える授業を創る』学事出版。

挑戦するスクールリーダー

学校づくり

大阪教育大学非常勤講師 森 均

1 進化型・自己開発型 講義をめざして

本講義を担当することは、私にとって大きな挑戦であった。校長として毎年変わり続ける教育界の状況に翻弄されながら、「このままでいいのか」「これから将来を担っていく人たちに私の経験を伝えたい」という思いと、既設校の閉校、新設校の開校に携わった校長経験に後押しされて、講義担当を引き受けた。

多くの校長は何代目かの校長として赴任する。そこには前校長のやり方と方針等をいかに引き継ぐかという難しい状況が待っている。少なくとも在任期間中には、前校長から引き継いだ問題を一つでも解決して、次の校長に引き継ぎたい、新たな問題を起こして引き継ぎたくないという強い気持ちになるのである。新設校の初代校長になれば、教育理念、学校

経営計画、教育目標、学校スローガン、校訓、学校生活の目標、校章、校歌、教員組織、様々な内規、学校マニフェスト、スクールカラー、スクールマスケット等を一から作成していく。まさしく「学校づくり」にまい進するのである。

本講義「学校づくり」は、この6年間に39名の院生が受講した。彼らは、昼は校長、教頭、首席(主幹教諭)、教諭、指導主事として働きながら学んでいる。職種も多様で、それぞれの勤務校や教育経験も大きく異なっているので、年度ごとに講義の内容・方法を変えるようにした。事例研究、ゲスト講師の話の傾聴、討議等を組み合わせて構成し、議論を深めていく中で徐々にスクールリーダーとしての実践意欲を高め、スクールリーダーの在り方を明確にするよう促してきた。到達目標は、赴任校の現状を分析し創造的にアイデアを示して実践し赴任校を

変える手法を自ら開発し、未体験なことでも挑戦し続ける姿勢を身につけることである。換言すれば、継続的なR(V・V・ビジョン)―PDCAサイクルを身につけることである。

2 タフな自己発達型 スクールリーダーをめざして

院生は、スクールリーダーとして将来どのような学校に赴任するかわからない。教育行政の立場で、わが国固有の問題に正面から対応することになるかもしれない。スピード感のある判断を求められる現場に遭遇することもある。したがって、何事にもくじけないスクールリーダーに成長するために、さらには変化する場合で様々なアイデアを基に、よりの確な判断や指示ができるようになるために、心の中にたくさんの引き出しを創るよう事例研究に力を入れてきた。

具体的には、学校改革に取り組んでいる学校、新設間もない学校、特色ある学校等について、一人ずつ事例研究を報告し、それを基に議論した。学校の問題点や課題を掘り下げることにより、スクールリーダーとしての疑似体験を重ねたのである。

また、話題になっている様々な事柄を取り上げ、校種を超えて将来の学校づくりをイメージできるように議論した。その議論に関わって、私のメーカー勤務(家電メーカーでの産業用直流電源の設計者・開発者)、教員(工業高校定時制課程非常勤講師、全日制課程講師・教諭)、教育行政(高等学校課指導主事、障害教育課首席指導主事)、教頭(知的障がい支援学校小学部・中学部担当)、校長(聴覚高等支援学校、工業高校、知的障がい高等支援学校、普通科高校・知的障がい生徒対象の自立支援コース設置校)さらには2度も2校の校長を兼務した経験を基に、疑問や問題の提起を意図的に行って議論が深まるようにした。私の体験も簡潔に話したが、

つい熱く語り合い時間を忘れることもあった。その際に気を付けたことは、矛盾に満ちたことでも恥ずかしいことでも私が体験した本当の話をするのであった。

3 スクールリーダーの話の 傾聴から一般化へ

事例研究と並行して、学校改革に取り組んでいる校長、特色ある学校の校長、

学校を立ち上げた経験のある方、管理職として転職経験のある民間企業の方等をゲストとして招いた。学校紹介のパンフレットやHPで得ることのできない学校改革や学校改善の取り組み方法、工夫等を語っていただき、院生と論議することで、本講義の到達目標をクリアできるように工夫した。ここで議論の発端となった例をいくつか紹介する。

例1 生活指導で苦しんでいる高校に赴任した校長：「サッカーの試合で使われているイエローカード、レッドカードを生活指導に取り入れたら、生徒が意識して校内の雰囲気が変わりました。」「教員が『やればできる』という意識になったことが大きいです。」

例2 伝統校に赴任した校長：「教員向けの『校長だより』を発行し徹底した情報発信を行っています。その結果、校長の方針や考え方が教員に浸透するようになりました。」「校長室に大きなホワイトボードを設置して、そこに首席、教頭、校長で議論した本校の将来構想や問題点を書いておくと、校長室にきた教員は、眼を凝らして見ますよ。その間に『お茶でもどうぞ』と言いながら、時間をかけてお茶を入れるんです。するとだんだんと校長の考えていることがわかっていったようです。」「首席を組織の中で明確に

位置づけ、放課後に行っていた会議すべてを授業時間に開催するようにしました。」

例3 10年間校長をされた方：「学校にはそれぞれの歴史と文化があります。そのことを理解し教員のプライドを認めることが大切です。保護者の役割が果たされず厳しい状況におかれた子どもたちに対する姿勢も大切だと思います。しかし、今から思うと現職校長の時はずっと勉強不足だったと思います。」

例4 大企業から小企業に転職された管理職の方：「大企業では、組織単位で仕事するので調整が大切です。またリーダーも必要です。しかし慣性モーメントが大きいのでスタートするまで時間がかかりますが動き出すと早い。小企業は個人ベースで動くのでリーダーは必要ありませんが、社長の一声でストップできる。でも方針がぶれやすいです。」（会社が失敗した場合）大企業の場合、社員はみんな「少しずつ悪いところがあった」と思っています。『責任をとるのは私じゃない』とも思っています。しかし小企業の場合は、社長の責任です。学校では、答えは一つではなくいくつもあることを教えてほしい。また競争させてほしい。社会にでると競争させられますから。」

例5 NPO法人として学校を立ち上げた方：「地域に受け入れられることを最優先に取り組みました。NPO法人の趣旨が誤解されないように。そして、保護者と教員が話し合い、地域の人の協力もいただいて学校を創っていきました。」「納める授業料は保護者の収入に応じて自己申告制、教員の給与も教員の必要度に応じて自己申告制です。」「答えは一つではなく、いくつもあることを教えることが大事だと思います。例えば3+2（ ）ではなく、（ ）+（ ）=5を。」

このような話から院生はそれぞれの立場で内省を深め一般化を図っていった。

4 スクールリーダーの資質

本講義で自らの取り組みや人生を語っていたゲストの方々には「走り続けてきたけれど、今回のことで立ち止まっていた。今までの取り組みを振り返ることができた。」「現職院生の皆さんから力をいただいた。」と言いながら、志半ばで頓挫せざるを得なかった多くの教職員の人生もご存知だし、多くの人達の支えがあったことも自覚され、校長として仕事ができることに感謝されていると感じた。そしてそのことからくる、自然な謙虚さを感じた。現職の校長や指導主事に語る

ことは大きなプレッシャーであったと推測するが、理屈抜きで新たなことに取り組む、挑戦する姿勢をお持ちであったと思う。自然な謙虚さ、と、挑戦する姿勢、それに、へこたれないタフネス、この3点が語っていただいた方々の共通項であった。多様な教職員をまとめていくスクールリーダーにとってこれらのことも隠れた資質なのかもしれない。事後レポートを読むと、現職院生の遺伝子にこれらのことも知らず知らずのうちに組み込まれたと確信する。

Profile

大阪女学院大学・短大アドミッションセンター次長
森 均 (Mori, Hitoshi)

工業高専電気工学科卒業後、家電メーカーで生産・品質管理に従事、修士課程修了後は半導体メーカーで産業用直流電源の設計・開発に従事。その後、大阪府立工業高校教諭、大阪府教育委員会高校教育課指導主事、養護学校教頭、障害教育課首席指導主事を経て、生野高等聾学校、だいせん高等聾学校、茨木工科高校、たまがわ高等支援学校、枚方なぎさ高校の校長を歴任し、定年退職。工学修士（大阪工業大学）、教育学修士（大阪教育大学）。日本教育カウンセリング学会「サイエンティスト・プラクティショナー賞」受賞。

として判断する経験を積んでもらうこととした。「自分が校長ならどうするか」を考え、それをお互いに出し合っけて気づきを深めていくのである。

現場実習では、院生(実習生)の学校・職位・ニーズなどに応じた適切なインターンシップが実施されることが必要である。院生には、教員、首席、指導主事、教頭、校長、さらに元校長もいるなど実に多彩である。日程に制約がある中で、そのニーズと実習現場となる学校や教育委員会事務局とのマッチングはいつも頭を悩ます問題である。幸いにも教育委員会事務局、学校現場とも、経験を重ねるにつれ、インターンシップの受け入れ先が拡大でき、現場との往還が充実したものとようになってきている。

3 授業の実際

授業の概要は以下のとおりである。

〈第1ユニット〉(4回程度)

『プランニングのために』

- ・ オリエンテーション／本授業の到達目標、授業概要、成績評価について
- ・ 演習／成功事例に学ぶ、危機管理

人事管理の実際、教育課題をめぐる
論点整理

- ・ インターンシップの目標設定と具体的な計画の策定

・ 仮想「校長室」での演習

〈第2ユニット〉(3日以上)

『実習』

- ・ インタビュー、シャドーイング、参画体験

〈第3ユニット〉(2回程度)

『振り返り』

- ・ 実習報告とシェア／実習報告を共有化し、考察を深める。

演習では、危機管理に関わって、事実確認、見立て、方針づくりを具体的事例に即しながら議論し、時にその判断の法的根拠を質す。ある時、受講生の在籍校で新聞報道される出来事が起きた。そういった時にはタイムリーにその事案を取り上げ、自らが校長ならどう対処するか、ディスカッションした。マスコミ取材への基本姿勢や対応の仕方なども、少し「いろは」を知っているだけで、学校と報道機関の双方にメリットがあるのである。国や大阪府の教育政策が報じられた時も同様である。これについては、大阪は話題に事欠くことはない。国に先駆けて

の橋下知事(当時)からの課題提起など、現在進行形のものについて、その背景や法的な整理を行うとともに、管理職として実践にどうつなげるかを意見交換した。平成25年度で言えば、いじめ、体罰、英語教育、授業評価、民間人校長、教育委員会制度などが話題となった。校長の人事管理については、府教育委員会発行の「ミドルリーダー育成プログラム」や成功事例を紹介しながら具体的な手法を学ぶよう工夫した。

以上の教室での事前学習をふまえて、現場実習(インターンシップ)を実施している。教育委員会事務局での実習は、「行政」の一端を知り、「行政機関」としての学校、そしてその長である校長の仕事を考える一助にしている。

校長のインタビューやシャドーイングでは、何より刻一刻と変化する状況に対応する校長の姿を目の当たりにでき、その中で「声かけ」の工夫や「プッチーダー」を育てることが次の「ミドルリーダー」に繋がる」といった視点、金(予算)や物(たとえばICT機器)などマネジメントツールの活かし方など、臨時的に積み上げられた「技(指導スキル)」や「実践知」の数々に触れる貴重な体験がな

れている。

「スクールリーダー・インターンシップ」を開設して7年、試行錯誤を経て一つの形ができてきた。実務体験とリフレクションを重ねながら、受講者である院生のスクールリーダーとしての「引き出し」を増やしつつ、理論を深め、実践的能力を引き出すことができる授業づくりをさらに進めていきたい。

Profile

大阪府教育委員会教育監
津田 仁 (Tsuda, Hitoshi)

大阪府立高等学校教諭から大阪府教育委員会指導主事、大阪府立松原高等学校長を経て、同委員会高等学校課長等を歴任。2013年より現職。大阪府教育委員会では、府立高校の総合学科の設置、特色づくり・再編整備計画の策定と実施、義務教育活性化推進方策の策定、学校評価や種々の学校経営支援事業の企画・実施等に携わる。共著に『格差をこえる学校づくり』大阪大学出版会。

学校の組織開発を担う構想力

スクールリーダー実践論

大阪教育大学非常勤講師 木岡 一明

1 授業の到達目標

到達目標を「教育マネジメントの考え方に立ち、学校組織開発を推進するミドルリーダーとしての役割をいかに発揮していくかについての理論的な知識と実践的な技術を獲得し、コンサルテーション・スキルを高める」ことに定め、併せて修士論文を構築するために必要な教育マネジメントの理論的基礎を学修するように求めている。

2 授業の概要

この科目のテーマとして「学校組織開発の理論と実践」を掲げ、木岡一明編『ステップ・アップ 学校組織マネジメント』（第一法規、2007）をテキストに、(1) 学校組織開発の事例（複数校）をもとに

組織開発を促進する要因の分析を行い、(2) それらの諸要因と「ミドルリーダー」の動きとの関係を考察し、(3) 要因間の関係構造を踏まえたコンサルテーションのあり方を検討する、という流れで進めている。

そのゴールは、勤務校の組織開発プランのたたき台づくりにある。そのため、PBL (Problem-based Learning) 方式に基づいて授業内容と勤務校をリンクさせ、授業で検討したことを、フィードバックできる工夫を盛り込みながら、学校の置かれている内外環境の状況に応じた効果的な学校組織開発を進める上で、①どこに着手ポイントがあるのか、②いかなるゴール見通しが立ちうるのか、③どのような手順でゴールへと向かうのか、を自ら見いだしうるようになるよう、論議を焦点化している。

基本的には、目標（ゴール）から逆算

的に現状までのルートを手繰っていきけるような「しこう（思考・指向・試行・・・）」を促しているが、受講者からは、たとえば「目標と現状の差（ギャップ）が問題という知見」を得て、「それまでは『現状』が見えていないから、問題として捉えていないのだ」と思っていたが、目標がない（あるいは具体的な姿としてイメージできていない）から問題として捉えることができていないのだと思った。だからこそビジョンの共通確認が必要となると思う。」といった感想が寄せられている。

方法的には、事態を多面的に捉えられようフレームワーク思考を鍛えようとしており、授業中にも演習を採り入れた種々のワークシートや分析フレームを提示している。この点については、受講者からは「どの軸に乗せていくかで、違った物の見方、考え方ができるかが大切であり、フレームを共有しながら、議論することの必要性を認識できた。自校の実践の中で、どれだけその意識を持って、組織運営できているか、改めて省察していきたい。」といった受け止め方が示されている。

組織観としては、学校組織を「柔らかな組織Ⅱ石垣型組織」と捉えて説明している。この点では、たとえば、受講者か

らは「学校組織を考えた時、石垣型組織での隙間役割は大きい。①専門性や個性の発揮の相互の絡ませ方、②できた隙間をいかに見つけ、どのように埋めるか、は、実践で重要なポイントである。また、管理職の動きとして、次の2点は、現場でぜひ実践していきたい。①管理職自らも他の教員と共に教育をつかさどり、日常的に児童生徒の傍らに居るといふ強みに目を向け、自分の目や耳になってくれる人を巻き込みながら情報収集する。②声に直接耳を傾け、実態を見つめて、一緒になって問題の所在や問題解決の方策を開発する。」といった捉え方が提起されている。

また、実際の事例分析においては、たとえば受講者からは「K校長（山形市A中学校）のPDCASマネジメントに、校長またはリーダーの新たな役割を発見した。最後のSはShowのことで、学校での教育成果を学内外に見せることが大事だと感じた。それぞれの先生単位で良い取り組みや活動をして、知ってもらわなければ存在しないのと同じである。さらに、同じ成果を見せる場合でも、相手によって見せ方を工夫する必要がある。ここでも分析力が重要となる。」という考察がなされている。

いずれの論点においても、教授するというよりも、受講者自身の気づきを重視した授業展開を意図している。

3 教育マネジメントの基本的な考え方

1. ミドル・アッパダウン

学校は変化しにくい。それは、子どもたちをリスクに晒すまいとする姿勢の表れとして理解できる。学校が変化しないのは、今のほうが安全であると捉えられているからである。変化を促すには、今が危険であると考えられねばならない。そう考えた人が、安全な教育システム構築に向けて人々の動きを喚起し、リスク回避の難しさをわかりつつ生じうるリスクを予見し、そのための予防措置とリスク発生後の事後措置を講じながら危機的事態を乗り越えていく。ミドルリーダーのこうした役割発揮によって、ようやく学校は「組織」に成っていくのである。そのような認識力と行動力を備えた人が三人集まって協働し始めると、実際に学校は変わり始める。チームとしてお互いの不足を補いつつ、協働的な試みについて進捗状況を言い合い、その進展を喜

び、相互に批判しながらも周囲の人々に試みのよさをアピールしていく。それが他の人々に反響し、しだいに人々を巻き込んでいく。これが学校組織開発の展開である。ただし実態を捉えるには多面的な見方と新鮮な情報が必要であり、そうした情報収集には学校内外を行ったり来たり、上がったりがつたりすることが必要なものである。そうして得た現場の生情報をもとに、できそうなことを提案して戦略マネジメントを補佐し、校長からの方針を受けて具体的なシナリオを描いて職員に提示する。こうしたミドル・アッパダウンな動きが学校を動かしていく。

2. 学校において「協働」を促すには

組織感情を揺さぶっていくことが重要である。組織感情において「危機感」が生じてくるならば、事態に変化が生じる。ただし、強すぎる「危機感」は、人々の目を未来にではなく現在に縛り付け、動きを硬直させる。自分一人では立ち向かえないけれども、いっしょに動いてくれる誰かがいるという仲間の存在は大きい。つまり、「危機感」には程よい「安心感」が伴われなければならない。その「安心感」を醸成し動きが持続するには、自

己肯定感や成功の確信・見通し、確かな支援の実感といったプラス感情が必要である。

事態の変化を加速させるのは、この「危機感」と「安心感」の強度であるが、変化を加勢させるのは、「緊張感」と「効力感」である。「緊張感」だけでは硬直してしまつて指示待ち姿勢が強くなる。自律的な判断が機能するのは、一定の成果や手応えを実感して心に余裕ができることが重要なのである。学校ではひたすら向上を目指して努力し続けるしかない目標（向上目標）を掲げがちである。それでは、いつまで経っても達成感が得られずに疲れていく。達成目標をもとに取組の具体化や明確化を図っていくことが必要である。

こうした変化の範囲が広がっていくには、同調する人々がしだいに増えていく（共鳴・共感）ことが必要である。波紋が広がるように、たとえば校長、教頭、さらにはミドル層や事務職員へと「志」が伝播していくならば、それぞれの局面で変化が促され、全体の動きへと発展していく。一斉に一律に動き出そうとすると、人々の足並みを揃えるのが難しい。したがって、できるところから、できるときに、できる人が少しずつ動き始めること

が肝要であり、しだいにその動きに周囲の人々を巻き込んでいくことである。

さらに、変化が次元を超えて広がっていくには、たとえば「学校評価」を「監視の道具」から「対話の道具」へ、といったように、認識を発展的に（プラス思考的に）一変させる「観の転換」が必要である。マイナスに眼を向けると元気が萎える。長所を足がかりに、よさを活かす方向で取組を進めて「効力感」を高めつつ、蓄えられた元気や勇気をバネにして、マイナスにも立ち向かっていくという順序が、意欲や努力を長続きさせる。

Profile

名城大学大学院教授、大学・学校づくり研究科教授
木岡 一明 (Kioka, Kazuaki)

公教育経営学専攻。学校評価と学校組織開発を統一的に研究する。筑波大学大学院博士課程単位取得退学、教育学修士。摂南大学助教授、国立教育研究所総括研究官を歴任。兵庫教育大学客員教授、東京学芸大学客員教授、日本教育経営学会理事、日本教育制度学会理事（紀要編集委員長）、日本教育行政学会常任理事。日本教育事務学会常任理事。学校法人東邦学園理事。主著に『新しい学校評価と組織マネジメント』第一法規、『学校評価の「問題」を読み解く』教育出版、がある。

資料 SLC 修士論文題目、SLP 報告書一覧

■ スクールリーダー・コース (SLC) 関係の修士論文題目 ■

- 高木 浩志* 2003 中学校英語科教育と国際交流学習に関する研究—グローバルコミュニケーション能力の育成に向けて
- 落合千佐子* 2004 グローバル教育の目標論・カリキュラム論の実践的考察—大津和子の理論を軸に
- 矢野 玲子* 2004 公立小学校における英語教育の理論と実践—松川禮子の所論を中心に
- 西本 厚江* 2006 看護基礎教育における卒業時到達度評価の実践的研究
- 深川 八郎* 2006 授業評価のシステム化と運営—大阪の「授業システム」研究推進校の実践をとおして
- 森 均* 2006 校長の人事異動に関する実証的研究—大阪府立高校 30 年間の事例として
- 米田あき子* 2006 小学校と児童養護施設の連携
- 吹田 淳一* 2007 学校評価の実施、改善に関する実践的研究—高等学校の事例に基づいて
- 末吉 正典* 2007 学校と地域の連携に関する事例的研究—先進三校と堺市立浜寺小学校を中心に
- 清尻 直希* 2007 学校選択制度による公立学校改革の可能性—教育ガバナンスの再構築をめざして
- 磯島 秀樹* 2008 学校評価の実践に関する事例研究—「学校教育自己診断」の実践的展開
- 山中 矢展* 2008 特別支援学校におけるミドルリーダーの役割と行動—首席の職務内容調査を通して
- 小川 潔 2008 視覚障害教育における専門性継承のための方策—ハンドブックと校内研修プログラムの開発
- 西川 隆彰* 2009 校長のリーダー行動に関する事例的研究—ミンツバーク「マネジャーの仕事」を手がかりに
- 荊木まき子 2009 学校児童・生徒支援体制構築の現状とその展望—スクールカウンセラーの視点からの一考察
- 井出 一志 2010 シュタイナー教育の公教育における実践にかかわる一考察—「畏敬の念」につながる教師像・子ども像を手がかりにして
- 廣瀬よし子* 2010 学校と地域の連携を深めるスクールマネジメント—熊本小学校の実践をとおして
- 大西 義浩* 2011 専門高校生の進路意識の形成に関する実証的研究
- 梶本 佳照 2011 「学校情報化」を促進するためのマネジメントパッケージの開発—2つの学校における活用をとおした有効性の検証
- 橋本 剛幸 2011 生涯スポーツにつながる小学校、中学校、高等学校の体育カリキュラムの研究—スポーツの楽しさを重視した授業を目指して
- 中尾 順子 2011 新たな視点を獲得する「読み」の授業に関する探査的研究
- 小山 将史 2012 生徒自らが家庭内外の学習環境を構築する力を育てる実践研究—ハンドブックを活用した高校での授業デザイン
- 浜崎 仁子* 2012 「教職員の評価・育成システム」の政策と実践—同僚性・協働性を生かした学校経営
- 西川 潔* 2012 内発的改善力を基礎とした学校組織改革—統制化と協働化の共存を基軸に
- 深野 康久* 2013 教育政策の展開と継続的 school 改革における校長の役割—大阪府立 A 高校における 10 年間の改革実践を事例に—
- 福山恵美子* 2013 知的障がい特別支援学校におけるチーム・ティーチングに関する実践的研究—授業分析と AT の支援に焦点をあてて—
- 山下 真澄 2013 教育活動ができる動物飼育員の養成に関する研究—動物ガイド実習の評価開発と教育効果について—
- 赤石美保子*、文田英之*、松山康成、高元伊智郎*、中田淳子、2014 (予定)

(注) 数字は年度、*は大脇が指導、「学校教育論集」(2005～現在) 参照

■ スクールリーダー・プロジェクト (SLP) 研究報告書一覧 ■

(*は関係報告書)

A. スクールリーダー・フォーラム報告書 (SLF)

スクールリーダー・フォーラム事務局編、大阪教育大学・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会合同プロジェクト (大阪府は 2009 年から参加)

- ・第 1 回「学校教育自己診断を実践する—学校を開く試み」2003.3、105p.
- ・第 2 回「学校を開く、学校を診断する—学校協議会と学校教育自己診断を連関させて」2003.11、140p.
- ・第 3 回「スクールリーダー養成の必要性と可能性—専門職大学院づくりを軸に」2004.3、160p.
- ・第 4 回「授業評価の理論・政策・実践—授業改革のために」2005.2、132p.
- ・第 5 回「リーダー層教員の力量形成—量的確保と質的向上」2005.11、100p.
- ・第 6 回「スクールリーダーの学習拠点づくり—大学と教育委員会のコラボレーション」2007.2、160p.
- ・第 7 回「学校課題への挑戦—経営革新プロジェクトの取り組み」2008.3、118p.
- ・第 8 回「学校の自己革新と支援体制—学校革新プロジェクト 2008」2009.2、96p.

- ・第 9 回「豊かな学校評価を求めて—自己評価と学校関係者評価」2009.11、108p.
- ・第 10 回「スクールリーダーの実践力育成—ケースメソッド学習入門」2011.3、130p.
- ・第 11 回「次世代スクールリーダーの育成」2011.11、108p.
- ・第 12 回「スクールリーダーの学びの場—理論知と実践知の対話」2012.11、126p.
- ・第 13 回「学校づくり実践を物語る—大学・学校・教育委員会のコラボレーション」2013.11、149p.

B. 学校評価実証校支援プロジェクト (SRP)

大阪府教育委員会・大阪教育大学合同プロジェクト

- ・「学校評価実証校支援事業報告会資料 2004」2005.3、[2005] 2006.2.
- ・「学校教育自己診断ハンドブック—活用の手引き—」(平成 17 年度大阪府教育委員会委託事業「学校評価実証校支援プロジェクト」) 大阪教育大学、2006.3.

C. 大学・教育委員会連携授業「大阪の学校づくり」

大阪教育大学スクールリーダー・プロジェクト編集・発行

- ・「大阪の学校づくり 2005—夜間大学院の授業実践」2006.3、102p.
- ・[2006] 2007.3、92p. [2007] 2008.3、90p. [2008] 2009.3、83p.
- ・[2009] 2010.3、72p. [2010] 2011.3、68p. [2011/2012] 2013.3、77p.

D. スクールリーダー・セミナー (SLS) *

- ・スクールリーダー・セミナー 2004 事務局編、大阪教育大学スクールリーダー・プロジェクト
- ・「学校づくりの思想と技術—学校評価を軸に」2004.8、134p.
- ・「学習するスクールリーダー—学校の組織づくりを軸に」2005.3、129p.
- ・スクールリーダーシップ講座 (大阪) 「学校づくりの理念と技術」広域大学間教員養成・研修コンソーシアム：筑波大学・大阪教育大学・千葉大学・東京芸芸大学、2006 年 5 月～8 月*
- ・スクールリーダー・セミナー 2010 大阪教育大学・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会合同プロジェクト「スクールリーダーの実践力育成」
- ・スクールリーダー・セミナー 2011 大阪教育大学・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会合同プロジェクト
- ・プレ・フォーラム (SLF12) 2012.8、プレ・フォーラム (SLF13) 2013.8.

E. 「スクールリーダー研究—教師の学習コミュニティ」*

スクールリーダー研究会、第 1 号～第 4 号、2010～2013.

F. 単行本・雑誌連載など*

- ・「学校評価を共に創る—学校・教委・大学のコラボレーション」学事出版 (編著)、2003 年度
- ・連載：スクールリーダー教育の構築—学習機会とプログラム、「教職研修」教育開発研究所、2006 年度
- ・連載：スクールリーダー教育の実践—カリキュラム開発と授業づくり、「教職研修」教育開発研究所、2007 年度
- ・連載：スクールリーダー養成の教職大学院、「教職研修」教育開発研究所、2008～2009 年度
- ・連載：大学と教育委員会のパートナーシップ、「教職研修」教育開発研究所、2009～2010 年度
- ・連載：行動派校長の学校マネジメント、「月刊高校教育」学事出版、2007 年度
- ・連載：学校革新への道—普通高校の組織マネジメント、「月刊高校教育」学事出版、2008 年度
- ・連載：ケースメソッド研究事始め—新たなスクールリーダー育成法、「月刊高校教育」学事出版、2011 年度
- ・連載：新時代のスクールリーダー、「月刊高校教育」学事出版、2012 年度
- ・連載：学習するスクールリーダー、「月刊高校教育」学事出版、2013 年度
- ・連載：スクールリーダーの学校づくり、「月刊高校教育」学事出版、2014 年度
- ・連載：校長力を高める、「悠 haruka」ぎょうせい、2006 年度
- ・連載：教育改革最前線：政策動向と実践課題、「悠+」ぎょうせい、2007～2008 年度
- ・教師のための学習コミュニティ—夜間大学院で学ぶ、2007.1、24p.
- ・教師の学習コミュニティ—進化する夜間大学院、2008.3、20p.
- ・スクールリーダー・プロジェクトの展開—大学と教育委員会のパートナーシップ、SLP、2009.3、24p.
- ・教師の学習コミュニティを創る—夜間大学院のスクールリーダー教育、SLC、2010.3、24p.
- ・スクールリーダー・フォーラムの展開—大学・学校・教育委員会のコラボレーション、SLF、2010.10、8p.
- ・教師の学習コミュニティの展開—学習するスクールリーダー、SLC、2011.3、16p.
- ・スクールリーダー・フォーラムの挑戦—大学・学校・教育委員会のコラボレーション、SLF、2011.10、16p.
- ・ひらく 教師の学習コミュニティ—夜間大学院のスクールリーダー教育、SLC、2012.3、24p.
- ・ケースメソッド入門—スクールリーダーの協同学習、SLP、2102.3、16p.
- ・スクールリーダーの学習コミュニティ—大学・学校・教育委員会のコラボレーション、SLF、2012.10、24p.
- ・スクールリーダーの学校づくり—理論知と実践知の対話、SLF、2013.10、32p.
- ・つなぐ 教師の学習コミュニティ—夜間大学院のスクールリーダー教育、SLC、2014.3、28p.

私の大学院生活、そして学び続ける私へ

実践学校教育専攻スクールリーダー・コース 深野 康久

学校観察の昼間

朝8時、大学案内やパンフレット類約10kg、それにノートと参考書とパソコンを鞆に入れて家を出る。退職後、大学の広報の仕事に再就職した私は、高等学校をまわり、学生募集のためのいわば営業活動をしていました。

訪ねた高校では、不審者と思われない程度に、迷ったふりをして校内を歩き、生徒に話しかけ、学校を観察しました。校長室は避けたのですが、私を見つけた校長先生は招き入れて学校の様子を語ってくれました。マスコミに話題となった学校にも行きましたが、報道とは全く違いました。学校は頑張っています。それぞれの学校が個性をもち、生徒と教員とが個性を磨きあっています。しかし、どの学校でも時間に追われたゆとりのない教員と生徒の姿があったことが気がかりです。

中身を覗ずに思い込みで学校を批判する風潮や、矢継ぎ早に出る改革施策に対して、頑張っている学校を語りたい、自分自身の学校経営を見直したい、それが大学院入学の動機でした。大学広報の仕事は、私の学校観察の実践でもありました。

理論知修得の夜間

駅から離れた学校もあります。運転が苦手な私は多くは徒歩で、荷物を持っての往復は辛い労働でした。熱中症に注意するよう大学院仲間の看護師さんが水分補給剤をくれました。鞆がさらに重くなるのですが、すごく安心でした。学校では放課後は嫌がられるので、4時ごろには天王寺に帰ってきます。授業が始まるまで、喫茶店でパソコンを出し勉強です。少しでも進めておこうと思うのですが、大概ウトウトしていました。

現職教員院生は責任ある仕事をした上での夜の学びです。キャンパスには小学校課程の夜間大学生もいます。学生たちは夜に会っても「おはよう」と挨拶します。定時制・通信制高校の校長時代、夜の「おはよう」は定時制文化だと知りました。さすがに大学院では「おはよう」は言いにくいですが、夜間の学びに苦勞しながら集う仲間の心意気だと思い

ます。

私は、学校は疲れていると思っていました。しかし、大学院での学びや学校訪問から、希望や力を多く感じました。うまく発揮されていないだけです。大学院での理論知と実践知との対話は学校活性化のエネルギーになります。こうした学びが今後益々重要です。

修士論文に向かう

2回生で修士論文作成が本格的に始まりました。仕事が変わり、足の痛みは消えましたが、新組織を立ち上げる仕事で、時間不足に変わりはありません。その中でも毎週のゼミに必ず1枚でも原稿を出すことにしました。リーダーはいろいろなことに直面します。苦しくても一度退いたら仲間はずれてきてくれません。前を向いている間は、誰かが支えてくれます。現職真っ盛りの仲間に比べてゆとりのある自分が引くわけにはいかない、そんな気持ちでした。時々大学院の先輩が励ましのメールをくれました。お互いの気遣いと個人の頑張りが夜間大学院の真骨頂です。

そして、修士論文を書き終えました。学校改革における校長の役割がテーマです。校長時代に感じていたことや言いたかったことが形を変えてはいますが、ほぼ含まれています。

私は入学時、「定年退職後の再出発ではなく、新しい出発」と書きました。では、これからの私はどうなるのか。たぶん前線には戻れないでしょうから、もうしばらく、理論知と実践知の対話を学びたいと思っています。ただし、自己紹介では「元校長」はやめて、「大学院修了生」と言うことにします。

Profile

帝塚山学院大学教職支援室長・特任教授

深野 康久 (Fukano, Yasuhisa)

大阪府立高校で18年間の教諭生活の後、大阪府教育委員会事務局指導主事。入試と研修以外のタフな仕事はほとんど経験した。2001年から府立高校3校の校長を勤めて、定年退職。帝塚山学院大学アドミッションセンター勤務を経て、現職。

夜間大学院の学びは“自分探しの旅”

実践学校教育専攻スクールリーダー・コース 福山 恵美子

ひたすら走りぬげるだけではサビシイ

大学卒業後、通信教育で小2級免許状を取得し、翌年念願の養護学校へ採用された。しかし、6年間教職を経験した後、退職。平成元年に講師として勤務するうちにやはり養護学校の教員になることをあきらめきれず、肢体不自由校で講師として勤務していた際に、自立活動(肢体不自由)教員免許を取得。養護・訓練教諭の採用試験を受験し、平成7年12月に養護・訓練教諭として、正式採用。その後、様々な障害のある子どもと出会い、障害について、また障害児教育についてもっと学びたいという気持ちが湧き上がり、聾学校教員免許、自立活動(聴覚障害)教員免許、言語聴覚士の資格を取得してきた。振り返ると、そこには“馬車馬のごとくひたすら走りぬけてきた”自分がいた。

チャンスを活かす

私は現在、副校長(教頭職)として特別支援学校に勤務している。教頭職は管理職であるが、児童生徒の教育を担当している教員に近い立場であるとともに、色々な角度から客観的に学校現場を捉えることができる立場にある。本校は保護者との連携を始め、教職員が組織として動けるような組織づくりなど様々な課題を抱えており、これらの学校課題に日々取り組んでいる。しかし、ふとこのままで良いのかと考えることが多くなった。何かが足りないのである。そんな時、附属校勤務でもあったため夜間大学院・実践学校教育専攻が身近に感じられた。自分は大胆な所があり「なるようになる」という思いと、この物足りなさをきっと「充足してくれる」という期待から、夜間大学院の扉を思い切ってノックした。

夜間大学院での学び

夜間大学院では、様々な立場の方々が学んでいる。このことは自分にとって、とても刺激になった。1年目は講義を聴いている自分、周りには仲間たち、そしてレポートや試験に四苦八苦している自分がいた。何十年も昔に戻ったような懐かしい気分になった。決して楽しいことばかりで

はなかったが、これが明日への活力となった。そして2年目、修論の取りかかりが遅く、スタートは最悪であった。しかし、指導教員の大脇教授が丁寧にそして根気強く指導して下さい、また、ゼミの仲間と刺激し合って、修論を頑張って仕上げる事ができた。

修論のテーマを決めるまでが苦しかったことをよく覚えている。論稿を読み、まとめ、それに対して、自分なりに考察し意見を述べることを繰り返した。読みぬく、考察する、という点が自分はとても弱いことがよくわかり劣等感にさいなまされた。しかしその都度、大脇教授は、「井戸を掘るようなものだ」と言われ、的確なアドバイスをして下さった。ああでもない、こうでもない、本を探し、論稿をインターネットで検索し、求めているものが見つかった時は本当にうれしかった。

研究を進めるに当たっては、当然研究協力者が必要不可欠であるが、幸い関係者の皆さんは、快諾して下さい、本当に有り難かった。また、本校の金森裕治校長はどんな時も私の学びを支えて下さった。物理的なことはもちろん、気持ちが不安定になった時などもずいぶん助けられた。心から感謝している。時間的な制約がある教頭職が夜間大学院で学ぶことは厳しいが、周りの方々の協力と理解があってこそ、初めて実現するのである。このことを痛いほど経験した2年間であった。

終わってみればあつという間であったが、この学びで得たことを忘れず、今後に繋いでいきたいと強く思っている。

Profile

大阪教育大学附属特別支援学校副校長
福山 恵美子 (Fukuyama, Emiko)

養護学校(知的、肢体不自由)、聾学校で勤務。この間、大阪府から大阪教育大学に内地留学生として派遣され、1年間、教育、医療、福祉の連携について研究する。言語聴覚士。平成21年度から大阪府立堺聴覚支援学校教頭。平成23年度より現職。修論は「知的障がい特別支援学校におけるチーム・ティーチングに関する実践的研究—授業分析とATの支援に焦点をあてて—」。生涯発達研究会発行『発達人間学研究』第9巻第1号、2003の中で「知的障害教育の歴史」を担当執筆。

スクールリーダーの学びを大切にしたい

実践学校教育専攻スクールリーダー・コース 赤石 美保子

スクールリーダーの「学び」とは

「教師は学び続けなければならない」と言われている。その理由は言うまでもない。グローバル化、情報化が進み、価値観や家族の在り方に社会的変化がみられるようになった。それに伴い保護者・地域からの教育へのニーズや学校への期待は多様化し、いじめや不登校、暴力行為、学力や体力及び規範意識の低下が懸念されている。また、教職員の育成に伴う課題が顕在化し、かつて自分が子どもの時代に先生から学んだ教育の方法や教員免許取得時の大学での学びがそのままでは活かせなくなっている。しかし、私たち教師は、どんなに激しく社会が変化しようとも、子どもたちに対し教育の「可塑性」と「普遍性」の両側面から教育を行わなければならないという責任がある。単に話を聴いたり、書物を読んだりといった経験を重ねる「学び」では済まなくなった時代の風を感じ、大阪教育大学大学院 実践学校教育専攻への入学を決意した。

大学院の学びの利点は、現職に就きながら広い視野に立って精深な学問を修め、専門分野における理論と応用の研究能力及び教育実践の場における教育研究の推進者として能力を高めていくことにある。この1年間の学びを通じて、「教師の学び」には「何を学ぶのか」「なぜ学ぶのか」という目的意識を持って学ぶことが大切であることを改めて実感した。

「学び」の中で学んだもの

校長に求められる主な能力は、「組織マネジメント力」と「リーダーシップ」である。しかし、その責務は、教育界をめぐる激しい社会的環境の変化と多様化した価値観の中、目の前の課題解決に追われ、それらの機能を果たすべき十分な実践に至りにくい。では、どのようにすれば校長としての職責が果たせるのか。私は、その一助として校長としての「指標」を持つことであると考える。

大学院では、「実践教育学特論」をはじめ、「学校マネジメント学」「大阪の学校づくり」「教育プロジェクト研究」など、教育実践の理論的基盤を確立するための科目や、子どもの心理や行動など心理学や生徒指導の側面から考える科目、インターンシップなどを通じて実践的能力の形成に関する科目など、多領域にわたって多数設定されている。この広領域多選択型のシステムによって、等身大の自分と向き合

うことができ、省察し、「教育とは何か」という本質を探ることができた。それぞれの学びのプロセスを通して、経営者として、人材育成の指導者としての「指標」を見出し、将来に備えるべき力を獲得することができるものと考えている。校長は、学校運営において高い教育理念を持って実践していくのは言うまでもない。しかし今後は、これまでの経験知と実践知のみで職責を果たすには厳しい時代だと考える。大阪教育大学大学院 実践学校教育専攻の学びは、現職に就きながら理論を学び、実践知と理論知を往還させることにある。この教師の学習コミュニティの創造こそが「教師の学び」であり、今後の教育の基盤になると考えている。また、それぞれの分野において著名な教授や講師陣から直に学ぶことができるのも大きな魅力である。

「教師」という自覚を持って

中国、前漢の学者戴聖が編纂した「礼記」に「教学相長ず」という言葉がある。これは、私が大学院の学びの中で尊敬する師から教わった大切にしている言葉の一つである。「教学相長ず」とは、「人に教えることと師から学ぶことは相補い合うもので、両方を経験してはじめて学業も向上する。」という意味である。教育を通じて子どもの成長を図るためには、まず教師が時代に合った成長をしなければならない。また、子どもの自尊感情を高めるためには、まず教師が自尊感情を高めなければならない。私は、教育の実践者として、また研究者として、これからも先達の知見を謙虚に学び、自己の確立を図っていきたい。

Profile

大阪市教育センター主任指導主事
赤石 美保子 (Akaiishi, Mihoko)

1992 (H4) 年兵庫県伊丹市に採用後、1995 (H7) 年大阪市に転勤。大阪市立小学校2校に勤務。2001 (H13) 年アメリカへ海外派遣。2007 (H19) 年大阪市教育委員会事務局総務部企画担当の初代指導主事として、大阪市教育振興基本計画の策定や学校評価システムの構築などに携わる。2009 (H21) 年文部科学省の職員として学校評価第三者評価委員を兼務。2011 (H23) 年大阪市教育センターの主任指導主事として、管理職研修やマネジメント研修などを担当。2012 (H24) 年教務部教職員人事担当が所管する資質向上推進事業・教員復職支援事業などを担当し、現在に至る。

新たな「学び」を求めて創造へのチャレンジ

実践学校教育専攻スクールリーダー・コース 文田 英之

「学びなおし」を強く欲してチャレンジャーに

平成 21 年度「大阪教育大学大学院・実践学校教育専攻」の合格通知をいただいたが、その当時の校長としての勤務校の非常に厳しい状況から、やむなく入学を辞退した。その間、校長として、全力で学校経営にあたり、教職員との協働の結果、前任校は落ち着きを取り戻し、見違えるような学校になった。その後転職し、現任校も当初に比べて学校改善が急速に進み、教職員と生徒、保護者・地域との協働で、多くの取り組みが成果をあげ、学校力も高まった。その間も校長として、学校経営にあたっては、学校現場を取り巻く急激な変化の中で、今日的な新たな教育課題の解決に取り組むために、実践を生かしたより深い研究と自己の資質向上の必要性を感じていた。

このように長年「大学院で学びたい」という気持ちを持っていたが、今しかそのチャンスはないと思い、再度受験し、その機会を与えていただいた。大学院での「学び」では、今までの実践を理論的に捉え直すこと、そして、理論として学んだことを実践として学校経営に還元していくことを一番の目的とした。

「学び」の途中での新たな発見と実践

大学院での学習は、実際の勤務との関係、校長としての外部の仕事、とりわけ社会科の全国大会事務局長としての膨大な仕事量に忙殺されて、講義への参加がやっとの状況だった。当初、各講義の課題・レポートをこなすことに汲々としていたが、平日は出勤前の早朝中心、土日はできるだけ集中して、時間確保して大学院での「学び」に取り組んだ。徐々にペースを掴み出したが、だんだんと学習のハードルが高くなり、まるで「無酸素呼吸状態で、短距離走を繰り返している状態」の連続であった。本当に鍛えられた。

しかし、そのような中で、各講義の奥深さ、実習・ワークなどを通じて「学び」の楽しさ・新鮮さが実感できるようになり、少し余裕も感じられることもあった。現在もそのハードルは一層高くなっているが、大学院に入学して、教える立場でなく教わる立場・学ぶ者として、大脇教授をはじめとした多くの師、多様な経験を持つ学友との出会いと交流は自分にとっての「財産」になっている。特に、実践を土台に大学院での「学び」の中で、多くの学友と論議し、共に研究・ワークを重ねることは、「新たな発見と気づき」が

あった。

校長として、学校現場で教職員と接する関係とは違う、新鮮で刺激を受ける感覚で、自分自身を再活性化し、謙虚に「学ぶこと・学び合うこと」を体感させてくれている。

この一年を省察すると、学校経営に対して、今までと違った感覚で新鮮に、客観的・理論的に、冷静に分析・検討している自分自身がいることを実感している。そして、大学院での「学び」を学校経営に具体的に還元し、実践していることが多数あり、その成果は例年とは違う形で着実に結実している。

「学び」の先に創造しチャレンジしたいこと

長期履修生として大学院での「学び」に取り組んでいるが、当面は「修士論文」への取り組みを第一にしている。テーマは「未来の学校のグランドデザインの創造と策定」である。校長としての今までの実践の経験から、自分自身として考えられる「理想の学校とは」を想定しているが、現段階では完全に「森の中を彷徨っている状態」である。

今まで、大抵の逆境を克服してきた経験と自信があるので、これから一年「もがき苦しみながらも、やがて完結する自分自身」を考える。そのためには今までの経験知だけにとらわれず、新たな理論知・研究知が必要で、自分自身の価値観とフレームをどれだけ広げられるかが大切である。「研究とはどのようなものであるか」を教わりながら、当初の大学院での「学び」の目的を達成しようと決意している。「自分自身の変革」は楽しみであり、期待している。

学校経営という観点、そして何よりも「生徒のために」という教育の原点を実践者として研究者として、生涯取り組んでいきたい。そのための土台づくりを考えている。「欲張り感」がすぎるが、そんな「夢」を見させてくれる夜間大学院での「学び」は「魅力的」である。

Profile

大阪市立本庄中学校校長
文田 英之 (Fumita, Hideyuki)

農林水産省勤務後、昭和 59 年大阪市に採用、社会科教諭として 15 年。平成 11 年教頭となり、3 校 8 年勤務。平成 16 年アメリカの危機管理ライセンス (CPI) 取得。平成 17 年中国へ海外派遣。平成 19 年校長となり、現在 2 校 7 年勤務。平成 25 年度全国中学校社会科教育研究大会大阪大会・事務局長を勤める。

理論知と対話する現職教員の学び

実践学校教育専攻スクールリーダー・コース 松山 康成

大学院と仕事の両立

現職の小学校教員として夜間大学院で学んで1年、仕事と学業の両立は様々な課題に追われ、多忙を極めている。だが、大学院での学びを学級の子どもの関わりの中で活かし、また、日常の子どもたちや自らの指導の中で感じる問題を持って、大学院の授業に向き合うことができるので、多忙感以上に充実感を感じている。日々の理論と実践の往還が可能となり、教育実践の取り組みも深まっていると思う。

実践学校教育専攻には現職教諭だけでなく、校長・教頭、教育委員会指導主事などが在学されており、教員経験年数が浅い私にはすぐれた学友とのつながりができている。

本専攻の教授スタッフは実務家教員が少なく、研究者教員に恵まれている。専門性が高い研究と出会い、実践者と研究者の二つの観点から研究を進めることができる。実践者としての現職教員院生と研究者としての大学の先生との相互の敬慕が、本専攻の学びを支えている。

多彩なエビデンスとの出会い

夜間大学院では学術機関として有する様々な論文・報告・資料などのエビデンスと出会うことができる。授業では学会誌・大学紀要の学術論文が用いられ、講読法を学びながら研究内容・実践展開について研究協議していく。これまで触れることができなかった論文なども、大学のネット環境を通せばCinii等の有料の論文を読むことができ、図書館では学会誌等を読むことができる。また授業を通して多数の書籍に触れることで、研究や実践の動向や課題に触れて、教育実践を多角的に進めることができる。

私の研究テーマは子ども同士の対立やもめごとの臨床的研究である。これは教育心理学の分野と捉えていたが、発達心理学や教育社会学などの知見が含まれていた。この視野の広がりから得られるたくさんの知見やエビデンスを、学校現場の実践で活かしていくことができている。

現職教員と研究者の協働

大学院での学びを現場で活かす際や、エビデンスベーストの実践を行っていく際に課題となるのは、同僚教員との知識の共有が難しいことである。原著論文等を参考に実践をしていく場合、そこに記述されている用語や統計などを読み深めることが重要となり、専門的な知識が必要である。現場の教員と研究者を隔てているのは、共有できる言語が少ないことである。どれだけ専門性の高い、課題に見合ったエビデンスが示された実践でも、その知識や情報を共有することが難しければ、導入し実践していくことも難しい。

これから学際的な実践を行っていくためには、現場の教員と研究者の両者がそれぞれの専門性を尊重しながら、協働の場を設けて歩み寄っていくことが大切であろう。例えば、研究者の学校現場でのフィールドワークや、大学による現職教員対象の研究会・学習会の開催である。スクールリーダー・フォーラムは、教員、学校長、指導主事、研究者が一堂に会し、議論する機会である。これは、両者の距離を縮め、教員の学際実践意識と専門性を高める契機となる。夜間大学院への進学を意識することにもなる。

今回、私は休職せずに大学院に通うことを決めた。現職教員の大学院通学は時間的制約が多く、入学前周りの方から「忙しくて研究が深まらないのではないか」「仕事が中途半端になってしまうのではないか」など危惧された。私自身もこのことを心配していたが、学びながら実践できる、実践を省察できるという双方向的な学びを日々行っている。それは教育実践者として非常に有意義なことだと実感している。

Profile

寝屋川市立東小学校教諭

松山 康成 (Matsuyama, Yasunari)

平成21年、大阪府の小学校教諭に採用。初任時より子ども同士によるもめごと解決プログラム(ピア・メディエーション)の実践研究に取り組む。「ピア・メディエーションに取り組んで」で平成21年度寝屋川市教育実践文最優秀賞受賞。日本ピア・サポート学会認定ピア・トレーナー。修士論文では、学校・学級のいじめ防止を目指した、ピア・メディエーションプログラムを用いた仲裁者育成プログラムの開発とその有効性について実践的な研究を進めている。

つなぐ 教師の学習コミュニティ

夜間大学院のスクールリーダー教育

スクールリーダーの学びの場

- 目標** 理論の意識化・実践の対象化
- 参加者** 院生 交流の促進 協働の発展
- 目的** 目的の共有 交流の促進 協働の発展
- 基幹** 理論と実践の対話

夜間大学院で
最先端の学び
スクールリーダーに
専攻をします

大阪教育大学大学院 実践学校教育専攻 スクールリーダーコース (SLC)

E-mail: sld0203@cc.osaka-kyoiku.ac.jp | TEL: 06-6303-1100 | URL: http://www.osaka-kyoiku.ac.jp

スクールリーダーの学校づくり

理論知と実践知の対話

スクールリーダー・フォーラムの特徴

- 1. スクールリーダーの学びの場
- 2. 学校づくりの専門的知識
- 3. 実践知・理論知・研究知の対話
- 4. 実践者・研究者・院生の協働
- 5. 大学・学校・教育委員会のコラボレーション

フォーラムの概要

- 1. 12年度に1回のフォーラム開催
- 2. 講演・報告者12名、参加者1,215名
- 3. 報告書13冊(1,626頁)、15,000部発行
- 4. 大阪教育大学と全国の大阪教育大学大学院専攻との協働
- 5. 参加者のネットワークづくり

スクールリーダー・フォーラム事務局
大阪教育大学 天王寺キャンパス
E-mail: sld0203@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

スクールリーダーの学習コミュニティ

大学・学校・教育委員会のコラボレーション

スクールリーダー教育の歴史

大阪の「フォーラム」夜間大学院ブリッジ方式

大阪教育大学 夜間大学院の特徴

1. 豊かな専門的知識の養成
2. 実践知・理論知・研究知の対話による協働と実践の発展
3. 「実践・理論・研究」の対話による理論と実践の発展
4. 多様な実践のコースと学びの場
5. 専攻での実践知と大学院での理論知
6. 実践知と理論知の対話
7. 最先端・最先鋭な学びの場

福井の「学校実践」方式

福井大学 教職大学院の特徴

1. 豊かな専門的知識の養成
2. 実践知・理論知・研究知の対話による協働と実践の発展
3. 「実践・理論・研究」の対話による理論と実践の発展
4. 多様な実践のコースと学びの場
5. 専攻での実践知と大学院での理論知
6. 実践知と理論知の対話
7. 最先端・最先鋭な学びの場

スクールリーダー・フォーラム事務局
大阪教育大学 天王寺キャンパス
E-mail: sld0203@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

ひらく 教師の学習コミュニティ

夜間大学院のスクールリーダー教育

スクールリーダーコース (SLC) の理念と特徴

1. スクールリーダーの「学びの場」を創る
2. 学校づくりの理論と実践の対話
3. 学校を創る能力の育成
4. スクールリーダーの協働の発展
5. 大学と教育委員会・学校の連携協力

夜間大学院で
最先端の学び
スクールリーダーに
専攻をします

大阪教育大学大学院 実践学校教育専攻 スクールリーダーコース (SLC)

E-mail: nibu@bur.osaka-kyoiku.ac.jp | URL: http://www.osaka-kyoiku.ac.jp

スクールリーダー・フォーラム

夜間大学院ブリッジ方式

- ・ スクールリーダーの学びの場
- ・ 理論知・実践知の対話
- ・ 実践者と研究者の協働

スクールリーダーが集う時空間

スクールリーダー・フォーラムの挑戦

大学・学校・教育委員会のコラボレーション

フォーラムの理念

- 1. スクールリーダーの「学びの場」を創る
- 2. 学校づくりの専門的知識の養成
- 3. 実践知・理論知・研究知の対話による協働と実践の発展
- 4. 多様な実践のコースと学びの場
- 5. 専攻での実践知と大学院での理論知
- 6. 実践知と理論知の対話
- 7. 最先端・最先鋭な学びの場

フォーラムの概要

- 1. 9年度に10回(併せて11回のフォーラム開催)
- 2. 講演・報告者12名、参加者978名
- 3. 報告書13冊、総頁数1,626頁、10,000部発行
- 4. 大学・学校・教育委員会のコラボレーション

スクールリーダー・フォーラム事務局
大阪教育大学 天王寺キャンパス
E-mail: sld0203@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

SLE2010 教師の学習コミュニティを創る

夜間大学院のスクールリーダー教育

スクールリーダーコース (SLC) の理念と特徴

1. スクールリーダーの「学びの場」を創る
2. 学校づくりの理論と実践の対話
3. 学校を創る能力の育成
4. 第一線のスクールリーダーが学び合う
5. 大学・学校・教育委員会のコラボレーション

大阪教育大学大学院 実践学校教育専攻
スクールリーダーコース (SLC)

E-mail: nibu@bur.osaka-kyoiku.ac.jp | URL: http://www.osaka-kyoiku.ac.jp

SLP2009 OKU

スクールリーダー・プロジェクトの展開

大学と教育委員会のパートナーシップ

スクールリーダー・プロジェクトの理念と特徴

1. スクールリーダーの「学びの場」を創る
2. 学校づくりの専門的知識の養成
3. 実践知・理論知・研究知の対話による協働と実践の発展
4. 多様な実践のコースと学びの場
5. 専攻での実践知と大学院での理論知
6. 実践知と理論知の対話
7. 最先端・最先鋭な学びの場

大阪教育大学 (OKU) スクールリーダープロジェクト (SLP)

E-mail: sld0203@cc.osaka-kyoiku.ac.jp | URL: http://www.osaka-kyoiku.ac.jp

教師のための学習コミュニティ

Professional Learning Community for Teachers

大阪教育大学大学院 実践学校教育専攻

大阪教育大学大学院 実践学校教育専攻

E-mail: sld0203@cc.osaka-kyoiku.ac.jp